

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	近畿財務局長
【提出日】	2025年12月16日
【事業年度】	第25期（自 2024年10月1日 至 2025年9月30日）
【会社名】	株式会社イルグルム
【英訳名】	YRGLM Inc.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長執行役員CEO 岩田 進
【本店の所在の場所】	大阪市北区梅田二丁目2番22号
【電話番号】	(06) 4795 - 7500（代表）
【事務連絡者氏名】	執行役員CAO 栢木 秀樹
【最寄りの連絡場所】	大阪市北区梅田二丁目2番22号
【電話番号】	(06) 4795 - 7500（代表）
【事務連絡者氏名】	執行役員CAO 栢木 秀樹
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号）

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第21期	第22期	第23期	第24期	第25期
決算年月	2021年 9 月	2022年 9 月	2023年 9 月	2024年 9 月	2025年 9 月
売上高 (千円)	2,957,672	3,334,143	3,626,276	3,636,133	4,934,733
経常利益 (千円)	364,295	399,971	329,476	162,151	279,654
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失 (千円)	239,645	236,057	197,019	68,767	142,198
包括利益 (千円)	248,906	265,669	207,527	66,370	172,988
純資産額 (千円)	1,648,016	1,804,444	1,983,193	1,934,987	1,684,802
総資産額 (千円)	3,139,134	3,103,664	3,164,568	3,524,446	3,205,091
1株当たり純資産額 (円)	257.52	283.27	309.12	304.60	267.60
1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失 (円)	37.96	37.70	31.39	11.14	22.98
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	37.91	37.67	-	-	-
自己資本比率 (%)	51.8	57.1	61.4	53.3	51.8
自己資本利益率 (%)	16.5	13.9	10.6	3.6	-
株価収益率 (倍)	28.1	18.6	18.1	53.2	-
営業活動によるキャッシュ・フロー (千円)	573,316	433,646	564,845	386,259	590,444
投資活動によるキャッシュ・フロー (千円)	280,156	258,704	156,650	489,394	188,138
財務活動によるキャッシュ・フロー (千円)	23,973	315,629	292,831	53,967	264,204
現金及び現金同等物の期末残高 (千円)	1,391,750	1,259,748	1,375,332	1,324,920	1,461,669
従業員数 (名)	184	221	236	371	334

- (注) 1. 第23期及び第24期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については潜在株式が存在しないため、第25期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については1株当たり当期純損失であり、また、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
2. 第25期における親会社株主に帰属する当期純損失は、固定資産に係る多額の減損損失の計上等によるものです。
3. 第25期における自己資本利益率、株価収益率は、親会社株主に帰属する当期純損失であるため記載しておりません。
4. 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を第22期の期首から適用しており、第22期より主要な経営指標等については、当該会計基準等を適用した後の指標等となっております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第21期	第22期	第23期	第24期	第25期
決算年月	2021年 9 月	2022年 9 月	2023年 9 月	2024年 9 月	2025年 9 月
売上高 (千円)	2,532,205	2,583,879	2,476,250	2,410,737	2,419,551
経常利益 (千円)	278,840	315,807	232,327	193,678	258,102
当期純利益又は当期純損失 () (千円)	314,601	198,360	143,721	105,489	301,144
資本金 (千円)	318,065	318,065	318,065	318,065	318,065
発行済株式総数 (株)	6,372,415	6,372,415	6,372,415	6,372,415	6,372,415
純資産額 (千円)	1,447,879	1,538,667	1,654,863	1,637,918	1,310,818
総資産額 (千円)	2,792,447	2,563,858	2,506,995	2,746,298	2,338,018
1株当たり純資産額 (円)	229.29	245.76	263.16	265.80	211.44
1株当たり配当額 (円)	5.20	7.00	7.40	7.80	7.90
(うち1株当たり 中間配当額)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
1株当たり当期純利益又は 1株当たり当期純損失 () (円)	49.84	31.68	22.90	17.10	48.67
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)	49.77	31.66	-	-	-
自己資本比率 (%)	51.8	60.0	66.0	59.6	56.1
自己資本利益率 (%)	24.4	13.3	9.0	6.4	-
株価収益率 (倍)	21.4	22.1	24.8	34.7	-
配当性向 (%)	10.4	22.1	32.3	45.6	-
従業員数 (名)	124	136	142	145	141
株主総利回り (%)	63.2	42.0	34.7	36.6	39.2
(比較指標：配当込み TOPIX) (%)	(127.5)	(118.4)	(153.7)	(179.2)	(217.8)
最高株価 (円)	2,288	1,499	794	755	717
最低株価 (円)	909	675	549	469	499

- (注) 1. 第23期及び第24期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については潜在株式が存在しないため、第25期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については1株当たり当期純損失であり、また、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
2. 株主総利回りの比較指標は、2025年8月21日に東京証券取引所スタンダード市場へ上場市場区分変更をおこなったため、配当込みTOPIXへ変更しております。
3. 最高株価及び最低株価は、2022年4月3日までは東京証券取引所マザーズ市場における株価、2022年4月4日から2025年8月20日までは東京証券取引所グロース市場における株価、2025年8月21日以降は東京証券取引所スタンダード市場における株価を記載しております。
4. 第25期における当期純損失は、子会社株式評価損の計上によるものであります。
5. 第25期における自己資本利益率、株価収益率、配当性向は、当期純損失であるため記載しておりません。
6. 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を第22期の期首から適用しており、第22期より主要な経営指標等については当該会計基準を適用した後の指標等となっております。

2【沿革】

当社代表取締役社長執行役員CEO岩田進は、大学時代から個人事業主としてホームページ制作を行っていましたが、売上高の拡大を機に、2001年6月に当社の前身となる(有)ロックオンを設立いたしました。その後(株)ロックオンへ組織変更を行い、インターネット広告効果測定システム「アドエビス」、EC構築オープンソース・ソフトウェア「EC-CUBE」（当時の名称は「ECサイト構築kit」）の販売を開始し、2019年8月には社名を(株)イルグルムへ変更いたしました。

当社の設立から現在に至るまでの沿革は、以下のとおりであります。

年月	概要
2001年6月	兵庫県尼崎市にてホームページ制作会社として、資本金3,000千円で(有)ロックオンを設立
2003年2月	組立型ECサイト構築をコンセプトとして、「ECサイト構築kit」（現EC-CUBE）の販売を開始
2003年4月	大阪市北区南森町へ本社を移転
2003年7月	(株)ロックオンへ組織変更
2004年9月	インターネット広告の効果測定システム「EBiS」（現アドエビス）の販売を開始
2004年9月	大阪市北区堂島へ本社を移転
2005年7月	東京都渋谷区道玄坂に東京支社を開設
2005年10月	東京都千代田区神田へ東京支社を移転
2006年9月	日本発のEC構築オープンソース・ソフトウェア「EC-CUBE」を提供開始
2008年8月	大阪市北区梅田へ本社を移転
2012年3月	東京都中央区銀座へ東京支社を移転
2013年12月	ベトナムホーチミン市にオフショア開発拠点のLOCKON Vietnam Co., Ltd.（現YRGLM VIETNAM Co., Ltd.、現・連結子会社）を設立
2014年9月	東京証券取引所マザーズ市場に株式上場
2015年9月	(有)彩（現・持分法適用関連会社）の株式を一部取得
2017年7月	事業拡大に伴う従業員増加と顧客接点強化のため、東京都千代田区有楽町へ東京支社を拡張移転
2017年10月	より一層の営業力の強化と顧客サービスの向上を図るため、東京支社を東京本社に改称し、大阪との二本社制へ移行
2018年10月	(株)EVERRISEより運用型広告レポート自動作成ツール「アドレボ」事業を承継し、提供を開始
2018年10月	(株)イーシーキューブ（現・連結子会社）を設立
2018年10月	EC-CUBEのメジャーバージョンアップ「EC-CUBE 4」を提供開始
2019年1月	吸収分割によりEC-CUBE事業を(株)イーシーキューブへ事業承継
2019年8月	(株)イルグルムに商号変更
2020年1月	(株)オプトより広告効果測定ツール「ADPLAN」を提供する事業を譲受け、「アドエビス」への移管
2020年12月	(株)スプー（現・連結子会社）の株式取得
2021年7月	(株)トビカ（現・連結子会社）の株式取得
2022年1月	ファーエンドテクノロジー(株)（現・連結子会社）の株式取得
2022年4月	東京証券取引所の市場区分の見直しにより、東京証券取引所マザーズ市場からグロース市場に移行
2022年5月	ボクブロック(株)（(株)EC-CUBE Innovations）の株式取得
2024年1月	(株)イーシーキューブを吸収合併存続子会社、(株)EC-CUBE Innovationsを吸収合併消滅子会社とする連結子会社間の吸収合併
2024年9月	ルビー・グループ(株)（現・連結子会社）の株式取得
2025年5月	マーケティング・キャンペーン・マネジメント・プラットフォーム「アドエビスキャンペーンマネージャー」の販売を開始
2025年8月	東京証券取引所スタンダード市場に市場変更

3【事業の内容】

当社及び当社の関係会社は、当社、子会社7社（孫会社1社を含む）及び関連会社1社で構成されており、国内有数のシェアを誇る広告効果測定ツール「アドエビス」等のサービスを提供するマーケティングDX支援事業と、EC構築のためのオープンプラットフォーム「EC-CUBE（イーシーキューブ）」及びEC構築からマーケティング支援までのECソリューションを提供するコマース支援事業の2セグメントで事業を展開しております。

当社及び当社の関係会社の事業における当社及び関係会社の位置付け及びセグメントとの関係は、次のとおりであります。なお、以下に示す区分は「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 （1）連結財務諸表 注記事項」に掲げるセグメントの区分と同一であります。

（1）マーケティングDX支援事業

当事業は、広告効果測定サービス「アドエビス」、マーケティング・キャンペーン・マネジメント・プラットフォーム「アドエビスキャンペーンマネージャー」、運用型広告レポート自動作成ツール「アドレポ」、動画マーケティングのコンテンツ制作や運用を行う「TOPICA WORKS」、プロジェクト管理ツール「My Redmine」等のサービスを提供する事業であります。

（主な関係会社）

当社、YRGLM VIETNAM Co., Ltd.、(株)スプー、(株)トピカ、ファーエンドテクノロジー(株)及び(有)彩

（2）コマース支援事業

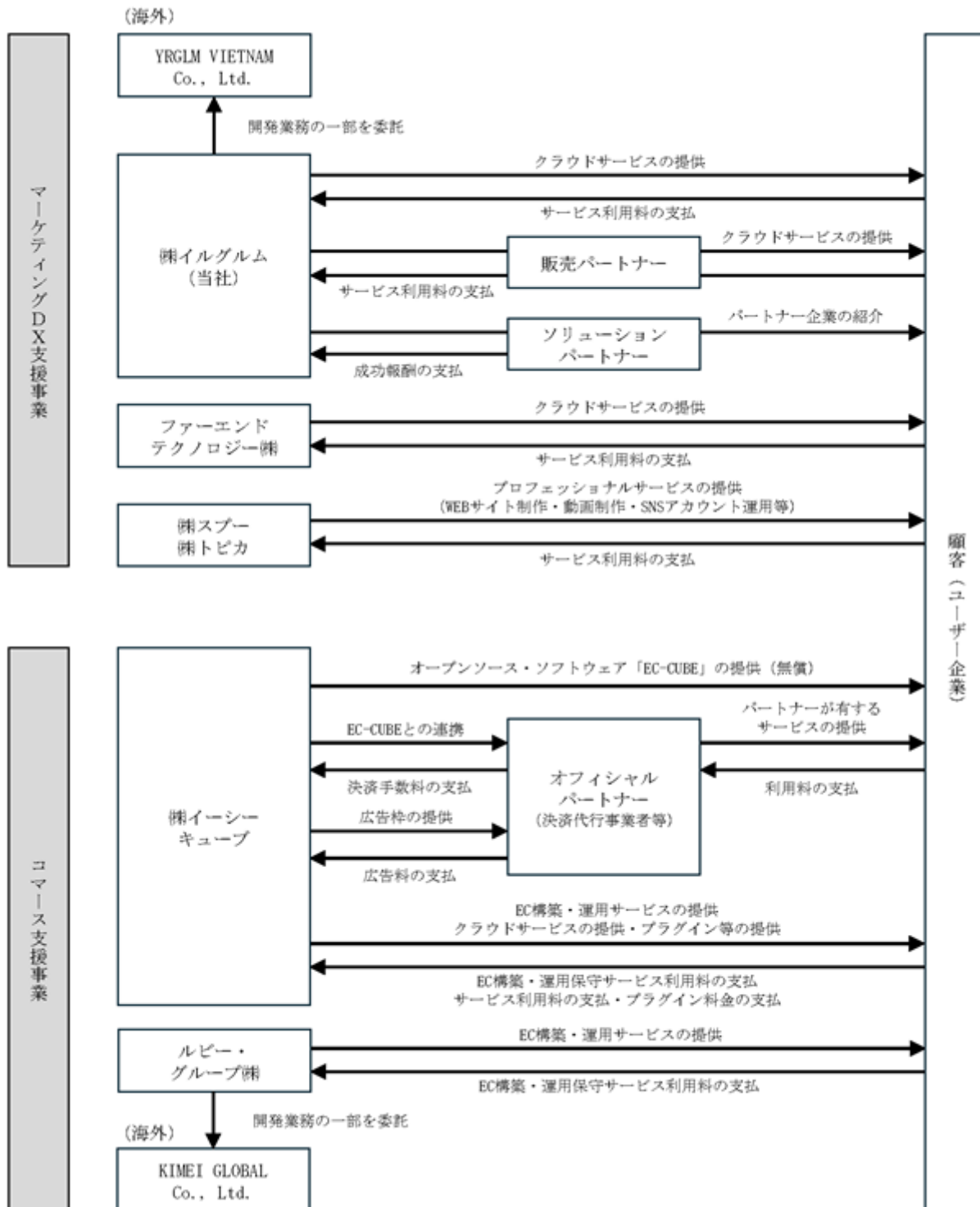
当事業は、EC構築のためのオープンプラットフォーム「EC-CUBE」及びEC構築・運用支援サービス等を提供する事業であります。

（主な関係会社）

(株)イーシーキューブ、ルビー・グループ(株)及びKIMEI GLOBAL Co., Ltd

〔事業系統図〕

以上述べた事項を事業系統図によって示すと次のとおりであります。



(注) 関連会社の肖像は、重要性が乏しいため記載しておりません。

4【関係会社の状況】

名称	住所	資本金又は 出資金	主要な事業 の内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容
(連結子会社) ㈱イーシーキューブ (注)8	大阪市北区	30百万円	コマース支援事業	90.00	役員の兼任3名
YRGLM VIETNAM Co., Ltd.	ベトナム ホーチミン市	4,256百万 ベトナムドン	マーケティングDX 支援事業	100.00	役員の兼任1名 当社からのソフト ウェア開発業務の 受託
㈱スプー	東京都千代田区	10百万円	マーケティングDX 支援事業	100.00	役員の兼任2名 資金援助
㈱トピカ (注)3、5	東京都千代田区	36百万円	マーケティングDX 支援事業	74.69	役員の兼任3名
ファーエンドテクノロ ジー㈱	島根県松江市	8百万円	マーケティングDX 支援事業	100.00	役員の兼任2名
ルビー・グループ㈱ (注)6、8	東京都渋谷区	30百万円	コマース支援事業	100.00	役員の兼任3名
KIMEI GLOBAL Co., Ltd. (注)7	ベトナム ホーチミン市	4,454百万 ベトナムドン	コマース支援事業	51.22 (51.22)	ルビー・グループ ㈱が51.22%出資す る当社の連結子会 社(孫会社)
(持分法適用関連会社) 有彩	大阪市北区	3百万円	マーケティングDX 支援事業	20.00	当社からのソフト ウェア開発業務の 受託

- (注)1.「主要な事業の内容」欄には、セグメントの名称を記載しております。
2.議決権の所有者割合の()内は、間接所有割合で内数であります。
3.特定子会社に該当しております。
4.有価証券届出書又は有価証券報告書を提出している会社はありません。
5.当社は、2024年12月25日付で、㈱トピカの株式を追加取得しております。
6.ルビー・グループ㈱は、2025年3月31日付で144百万円の減資を行ったことに伴い、特定子会社から除外して
おります。
7.KIMEI GLOBAL Co., Ltd.は、ルビー・グループ㈱の子会社であります。
8.㈱イーシーキューブ及びルビー・グループ㈱については、売上高(連結会社間の内部売上高を除く。)の連
結売上高に占める割合がそれぞれ100分の10を超えております。
- 主要な損益情報等

(単位:千円)

	売上高	経常利益	当期純利益	純資産額	総資産額
㈱イーシーキューブ	971,837	8,944	2,382	248,776	444,902
ルビー・グループ㈱	1,037,874	24,314	42,800	309,996	623,554

5【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2025年9月30日現在

セグメントの名称	従業員数（名）
マーケティングDX支援事業	167
コマース支援事業	135
全社（共通）	32
合計	334

- (注) 1. 従業員数は就業人員数であります。
2. 全社（共通）は特定のセグメントに区分できない管理部門等の従業員であります。
3. コマース支援事業の従業員数が前連結会計年度末と比べて27名減少しておりますが、連結子会社のKIMEI GLOBAL CO., LTD.において開発プロジェクトが終了したことにより、従業員が退職したためであります。

(2) 提出会社の状況

2025年9月30日現在

従業員数（名）	平均年齢（歳）	平均勤続年数（年）	平均年間給与（千円）
141	34.7	5.9	6,257

セグメントの名称	従業員数（名）
マーケティングDX支援事業	109
コマース支援事業	-
全社（共通）	32
合計	141

- (注) 1. 従業員数は就業人員数（当社から社外への出向者を除き、社外から当社への出向者を含む。）であります。
2. 平均年間給与は、基準外賃金及び賞与を含んでおります。
3. 全社（共通）は特定のセグメントに区分できない管理部門等の従業員であります。

(3) 労働組合の状況

労働組合は結成されておりませんが、労使関係は円満に推移しております。

(4) 管理職に占める女性労働者の割合、男性労働者の育児休業取得率及び労働者の男女の賃金の差異

提出会社

当事業年度		
管理職に占める女性労働者の割合 （％） （注1）	男性労働者の育児休業取得率（％） （注2）	労働者の男女の賃金の差異（％） （注2）
24.1	-	-

- (注) 1. 「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」（平成27年法律第64号）の規定に基づき算出したものであります。
2. 男性労働者の育児休業取得率及び労働者の男女の賃金の差異につきましては、「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」（平成27年法律第64号）及び「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」（平成3年法律第76号）の規定による公表義務の対象ではないため、記載を省略しております。

連結子会社

連結子会社は、「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」（平成27年法律第64号）及び「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」（平成3年法律第76号）の規定による公表義務の対象ではないため、記載を省略しております。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

当社グループの経営方針、経営環境及び対処すべき課題等は、以下のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

また、2026年9月期より、「マーケティングDX支援事業」から「マーケティングAI事業」、「コマース支援事業」から「コマースAI事業」へと事業セグメント名称を変更するため、事業セグメント名称については変更後の名称で記載しております。

1．会社の経営の基本方針

当社グループは「Impact On The World」を経営理念に掲げ、関わるすべての人に良い影響を与え、それを世界規模で実現したいという創業以来の想いを大切にしています。この理念の実現に向け、データとテクノロジーを活用して世界中の企業のマーケティング活動を支援し、売り手と買い手の幸せを創出することをビジョンとしています。

2．経営環境

日本は、今後急激な人口減少が進むという重大な社会課題に直面しており、将来的には人財不足により社会活動の維持が難しくなることが予想されています。その一方で、労働生産性が国際的に低いことから、テクノロジーを活用した業務改革による生産性向上が一層求められています。

これに対し、近年、生成AIをはじめとするテクノロジーの進化が著しく、業務の効率化のみならず、企業の価値創造のあり方にも変化をもたらしています。これにより、テクノロジーを使いこなし、AIと協働して新たな成果を生み出す人財の重要性が高まっています。しかしながら、生産年齢人口の減少が進む中で、このような高度人財の確保と育成は、企業にとって極めて重要かつ困難な課題となっています。

3．経営戦略等

当社グループは、2000年の創業以来、プロダクトを開発・提供することで社会に貢献してまいりましたが、2023年11月に発表した中期経営方針「VISION2027」において、プロダクト開発会社から、プロダクトと高い専門性を持つ人財によって顧客のビジネスを推進するビジネスパートナーへの変革を掲げております。具体的には、2026年9月期からはセグメント名称を変更し「コマースAI事業」と「マーケティングAI事業」の2つを事業ドメインとして、生成AIをはじめとする先端テクノロジーを活用しながら、顧客企業の生産性向上と競争力強化を支援し、日本が直面する社会課題の解決に貢献してまいります。

4．目標とする経営指標

当社グループでは、最も重要な経営指標として売上高を上げるとともに、適正な利益の確保や株主還元にも注力しております。中期経営方針「VISION2027」では、連結営業利益を黒字に保ちながら、生成AIをはじめとする先端テクノロジーへの投資を継続し、新たな収益の柱を構築することで、「コマースAI事業」及び「マーケティングAI事業」の拡大を通じて成長を加速させてまいります。これにより、連結売上高100億円の達成に向けた道筋を明確にし、利益の持続的成長を目指します。また、資本コストや株価を意識した経営の実現に向け、ROE10%以上を重視する経営指標として掲げております。

5．優先的に対処すべき事業上及び財務上の課題

当社グループは、主にインターネット広告市場を中心に事業を行っており、優先的に対処すべき事業上及び財務上の課題は以下のとおりであります。

(1) 事業展開について

コマースAI事業では、ECサイトの構築・運用サービスが順調に立ち上がり、売上拡大フェーズに入っております。さらに、子会社であるルビー・グループ(株)のECオペレーションマネジメント事業を通じて、EC事業者への支援を強化し、垂直統合モデルの実現に向けて、より広範なサービス展開を図ってまいります。

一方、マーケティングAI事業では、2022年9月期より新たなプロダクト「アドエビスキャンペーンマネージャー」の研究開発に注力しており、2025年5月より有償販売を開始いたしました。本プロダクトは生成AIを組み込んだ新時代のマーケティング支援製品であり、引き続き、顧客からのフィードバックを基に改良を重ね、提供価値の向上と拡販を推進してまいります。

(2) 環境変化への対応について

顧客ニーズの高度化・多様化、テクノロジーの進化と生成AIをはじめとするAI活用の拡大、規制強化やデータプライバシーへの対応、オムニチャネル戦略の重要性の高まり、サプライチェーンの見直しと効率化支援、さらにはESG（環境・社会・ガバナンス）への意識の浸透など、事業環境は大きく変化しております。当社グループでは、これらの環境変化を常に注視しながら、データとテクノロジーを活用したソリューションの提供を通じて、顧客企業の成長と社会課題の解決に貢献してまいります。

(3) 人財について

中期経営方針「VISION2027」で掲げる、プロダクトと高い専門性を持つ高度人財によって顧客のビジネスを推進するビジネスパートナーへの変革を実現するためには、当社の人的資本においても大きな変革が必要です。生成AIをはじめとするテクノロジーの進化に伴い、高度な専門性と創造性を兼ね備えた人財の獲得及び育成は、当社グループにとって極めて重要な経営課題となっております。今後も、多様な働き方を支援する制度や環境の整備、人財の成長を促す教育の充実を図りながら、持続可能な雇用の創出と人的資本の価値向上に取り組んでまいります。

(4) 研究開発について

昨今、生成AIのビジネス活用が注目される中、当社グループの事業領域であるマーケティングプロセス及びコマース領域においても、生成AIの活用はもはや欠かせないものとなっております。当社は2020年に専任の研究開発部門を設立し、生成AI応用、ナレッジ抽出、マーケティングの構造化に関する研究を進めてまいりました。また、「AIによるマーケティング施策企画推定」に関する特許を出願するなど、AIを企業知として制度化する研究開発体制を構築しております。今後も、AI企業として、AIを活用した独自サービス（アプリケーション）への開発投資を積極的に行い、AI関連技術の研究開発及び提供を加速してまいります。

(5) グループ経営管理について

以前の中期経営方針「VISION2023」では、次世代の事業の柱を見つけるための探索フェーズと位置づけ、複数の会社を子会社化することで探索を進めてまいりましたが、現行の中期経営方針「VISION2027」において、明確に事業領域を特定するに至りました。これに伴い、これまでは複数の子会社からなる企業集団を目指してまいりましたが、今後はシナジーを一層加速させるため、事業体の統合を進めるとともに、AI企業として必要な組織能力を獲得するためのM&Aを模索するなど、「VISION2027」の実現に向けて、より最適なグループ経営管理体制を構築してまいります。

2【サステナビリティに関する考え方及び取組】

当社グループのサステナビリティに関する考え方及び取組みは、次のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) ガバナンス

当社グループにおいては、サステナビリティ関連のリスク及び機会を監視し、管理するためのガバナンスに関しては、コーポレート・ガバナンス体制と同様となります。当社のコーポレート・ガバナンスの状況の詳細につきましては、「第4 提出会社の状況 4 コーポレート・ガバナンスの状況等(1) コーポレート・ガバナンスの概要」に記載のとおりであります。

(2) 戦略

当社グループは、サステナビリティについては「働きがい創出と事業成長を目指すと共にDX支援によって顧客企業の成長にも貢献し、豊かな社会づくりの一助となる」という戦略を掲げ、この戦略に基づき以下に取り組んでおります。

サービスに関する戦略

わが国の生産年齢人口は減少傾向にあり、将来的には人財不足によって社会活動の維持が難しくなることが予想されていることから、テクノロジーを活用した業務改革による生産性向上が強く期待されております。当社グループは、データとテクノロジーによる正確なデータ計測と広告運用の最適化、及び垂直統合型Eコマースの構築・運用支援を通じて、顧客企業のDX推進及び業務効率改善に寄与し、顧客企業の持続的な成長に貢献してまいります。

当社業務に関する戦略

当社グループは、ITを活用することで、リモートワーク制度導入やペーパーレス化の推進等、環境負荷が少ない業務運営に取り組んでおります。今後もこの取組を全グループ会社まで浸透させることで、環境負荷の軽減に貢献してまいります。

人的資本に関する戦略

・人財

「一人一人が力を存分に発揮し、ともに成長できる組織へ」という基本方針に基づき、HRポリシー、リーダーシッププリンシプルといった具体的な行動指針を設けています。この指針のもと、教育カリキュラムの充実や、相互理解と相乗効果を生むコミュニケーション機会の創出等に取り組むことで、持続的な人と組織の成長を目指しております。

・社内環境整備について

リモートワーク制度や時差出勤・勤務時間変更制度の導入や育児休暇取得の推進等により、働く時間や場所に柔軟性を持たせることでライフステージの変化にも対応し、山ごもり休暇（長期休暇）制度等も含め、ワークライフバランスを重視した施策を行っております。また、性別・年齢・国籍などのバックグラウンドを問わず、多様な従業員がパフォーマンスを発揮できる職場づくりを推進し、すべての従業員が活躍できる環境を整備しております。

・エンゲージメントサーベイの実施

定期的に従業員に対してエンゲージメントサーベイを実施し、組織課題の見える化に取り組んでおります。

(3) リスク管理

当社グループでは、サステナビリティ関連のリスクも含むリスク管理体制は各執行役員が自己の分掌範囲について責任をもって構築しており、その運用状況は監査等委員会及び内部監査室が監査を行っております。その詳細につきましては、「第4 提出会社の状況 4 コーポレート・ガバナンスの状況等(1) コーポレート・ガバナンスの概要」に記載のとおりであります。

(4) 指標及び目標

当社グループでは、ITを活用することで、ペーパーレス化やリモートワーク等環境負荷が少ない事業活動を進めていることから、サステナビリティ関連のリスク・機会を管理するための指標については、下記の人財の確保及び育成に関する指標以外は用いておりません。今後、当社において指標を定める目的や必要性を協議し、必要に応じて指標の策定を検討してまいります。

人的資本に関する指標としては、人財の多様性の確保を含む人財育成に関するものとして、次の指標を用いております。

なお、連結子会社は「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」（平成27年法律第64号）の規定による公表義務の対象外のため、当指標の目標及び実績を算出しておりません。そのため、当指標につきましては、提出会社のみ開示しております。

指標	目標	実績（当事業年度）
管理職に占める女性労働者の割合（％）（注）	30.0	24.1

（注）「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」（平成27年法律第64号）の規定に基づき算出したものであります。詳細は「女性活躍推進法に基づく一般事業主行動計画（計画期間 2022年4月1日～2027年3月31日）」に記載のとおりであります。

3【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、経営者が連結会社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に重要な影響を与える可能性があると認識している主要なリスクは、以下とおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 事業環境に関するリスクについて

インターネット市場等の動向について

当社グループはインターネット広告市場及びEC市場を主たる事業領域としており、当社グループ事業の継続的な拡大・発展のためには、更なるインターネット環境の整備、インターネットの利用拡大に加えて、インターネット広告の需要拡大や、EC市場の発展が必要と考えております。

しかしながら、インターネットの普及に伴う環境整備やその利用に関する新たな規制の導入、技術革新等により、今後のインターネットサイト運営の遂行が困難になった場合や、急激な景気の変化等によりインターネット広告の需要やEC市場での取引が縮小した場合には、当社グループの事業及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

なお、急激な為替変動や資源価格の高騰、東欧や中東における紛争に伴う政情不安、欧米先進国を中心とした高インフレの継続と急速な金融引き締め等により、わが国経済の先行きは不透明な情勢となっております。こうした環境変化が当社グループの顧客企業に及ぼす影響につきましては、高い緊張感をもって注視してまいります。

(2) 事業内容に関するリスクについて

マーケティングDX支援事業について

インターネット業界においては日々新しい技術や機能が開発されており、当社グループもサービス機能の拡充のための開発や、新サービスや新事業の開発に取り組んでおります。また、主力事業である「マーケティングDX支援事業」は月額課金型のサブスクリプションビジネスであり、業容拡大のためには契約件数の拡大が必須であることから、営業体制の拡充や広告宣伝の強化に努めております。

このようなシステム開発投資や、広告宣伝等への投資については先行投資となることから、投資先行の局面においては、利益率が低下する可能性があります。

また、これら先行投資を行ったにもかかわらず、想定どおりに事業拡大・成長が進まない場合には、結果として投資を回収できないこととなり、当社グループの事業及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

特定のサービスへの依存度について

当社グループは、高い利益率と成長性を得るために、自社開発サービスによる売上収益の比率を高める経営戦略を採っております。中でも、主力サービス「アドエビス」関連の売上収益は、当期には売上収益の約44.2%を占めており、当期において当社グループの売上収益の多くが同サービス関連の売上に依存していることを示しております。市場環境の変化、内外の景気動向の変化などにより、同サービスの需要に大きな変化が現れた場合には、当社グループの経営成績に影響を与える可能性があります。

また、インターネット広告市場においては、多くの企業が事業展開していることもあり、競合サービスが増加する可能性があります。今後、十分な差別化や機能向上等を行えなかった場合や、新規参入等により競争が激化した場合には、当社グループの事業及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

情報取得に関する制限について

当社グループの「アドエビス」はインターネット広告の効果測定システムを基盤としてサービスを展開しておりますが、インターネット広告配信や媒体、ブラウザ閲覧サービス運営者等の方針転換により、情報の自動収集に制限が加わったり、禁止されたりする可能性があります。このような事象が生じた場合、当社グループは独自の方法により同様のデータ収集に努める方針ですが、現在収集できているデータを取得できなくなることでサービスの品質が低下したり、情報の収集に対して追加コストが発生したりする場合等には、当社グループの経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

コマース支援事業について

当社グループの「コマース支援事業」では、EC構築のためのオープンプラットフォーム「EC-CUBE」の提供、「EC-CUBE」をベースとしたEC受託開発及び保守・メンテナンスサービスを行う事業を行っております。「EC-CUBE」はフリーミアムモデルのオープンソース・パッケージとして提供しており、EC事業者のインフラ整備や売上向上に貢献する一方、連携する決済代行事業者等のオフィシャルパートナーから決済手数料収入を得るというビジネスモデルです。

したがって、オフィシャルパートナーの経営成績に影響が生じた場合、当社への決済手数料収入の減少へとつながり、当社グループの事業及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

また、EC受託開発につきましては、顧客との契約に基づき、ごく短期的な受託開発を除き、履行義務の充足に係る進捗度を合理的に見積ることができる場合には、履行義務を充足するにつれて、一定の期間にわたり収益、費用を認識しております。そのため、何らかの要因により当初の計画から作業進捗に遅延がでた場合は、計上時期の遅れによる収益の減少、想定外の費用負担による費用の増加等、採算性が悪化する可能性があります。さらに、顧客の検収後に予期せざる不具合が生じた場合は、適正化のための追加費用や損害賠償請求への対応を余儀なくされ、当社グループの業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

M&Aについて

当社グループは事業拡大の手段としてM&Aを重要な選択肢の一つに位置づけておりますが、市場環境の変化等により買収した事業の運営又は今後の買収が計画通に進捗しない場合があり、当社グループの事業及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

(3) システム等に関するリスクについて

情報セキュリティやシステム障害について

当社グループの事業はインターネット環境に依存しており、サービス及びそれを支えるシステムやインターネット接続環境の安定した稼働を前提としております。また、事業展開を通じて収集・保管するビッグデータを分析基盤としてサービス提供や改善に活用しております。システムトラブルの発生可能性を低減して安定したサービス提供を行うために、安定的運用のためのシステム強化、セキュリティ強化を徹底しており、万が一トラブルが発生した場合においても短時間での復旧が可能な体制を整えております。

しかしながら、大規模なプログラム不良や、想定を大幅に上回るアクセス集中、コンピュータウィルス等により、開発業務やシステム設備等に重大な被害が発生し、正常に稼働できなくなった場合、及びその他何らかの理由によりシステム障害や保有するビッグデータの消失等が発生した場合には、当社グループの事業活動に支障が生じることにより、ユーザーとの信頼関係に悪影響を及ぼし、賠償責任の発生等によって、当社グループの事業及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

技術革新について

当社グループが事業展開しているインターネット関連市場では、活発な技術革新が行われておりそのスピードが速いことから、技術革新に応じたシステムの拡充、及び事業戦略の修正等も迅速に行う必要があると考えております。特に、2025年に入り、インターネット関連市場においては生成AIの急速な普及が見られ、自社サービス等への活用の動きが顕著であります。当社グループではこうした業界内外の動向を注視しつつ、迅速に既存サービスにて新たな技術を展開できる開発体制を整えております。

しかしながら、予期しない技術革新等があった場合、それに伴いシステム開発費用が発生する可能性があります。また、適時に対応ができない場合、当社グループの技術的優位性やサービス競争力が低下し、当社グループの事業及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

事業拡大に伴う設備投資について

当社グループでは、サービスの安定稼働やユーザーの満足度向上を図るためには、サービスの成長に伴い先行的にシステムやインフラに投資を行っていくことが必要であると認識しております。

今後、現在展開している事業で予測されるユーザー数・アクセス数の拡大、新規事業への参入、及びセキュリティ強化のための継続的な設備投資を計画しておりますが、実際のユーザー数及びアクセス数が当初の予測から大幅に乖離する場合、設備投資の前倒しや当初計画を上回る投資を行わなければならない、当社グループの事業及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

(4) 法的規制及び知的財産等に関するリスクについて

一般的なインターネットにおける法的規制について

当社グループの事業を規制する主な法令等として「特定電気通信による情報の流通によって発生する権利侵害等への対処に関する法律」（通称「情報流通プラットフォーム対処法」（旧「プロバイダ責任制限法」））、「不正アクセス行為の禁止等に関する法律（不正アクセス禁止法）」、「特定電子メールの送信の適正化等に関する法律（特定電子メール法）」、「電気通信事業法」及び「青少年が安全に安心してインターネットを利用できる環境の整備等に関する法律（青少年ネット規制法）」があります。

近年、インターネット上のトラブルへの対応として、インターネット関連事業を規制する法令は徐々に整備されてきており、今後、インターネットの利用や関連するサービス及びインターネット関連事業を営む事業者を規制対象とする新たな法令等の施行や既存法令等の解釈変更がなされた場合には、当社グループの事業が制約を受ける可能性があります。その場合、当社グループの事業及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

個人情報の取り扱いについて

当社グループでは、インターネット関連サービスの提供を通じ、各サービス利用者の関係者を識別することができる個人情報や、プライバシー情報を保有しております。

当社グループでは、個人情報やプライバシー情報を取り扱う際の業務フローや社内体制を明確化し、個人情報管理に関する規程を制定しております。併せて役員及び社員を対象とした社内教育を通じて、関連ルールの存在を周知徹底し、意識の向上を図っております。2006年12月より、財団法人日本情報処理開発協会（現一般財団法人日本情報経済社会推進協会）が発行するプライバシーマークを取得しております。

また、当社グループのコンピュータシステムは、外部からの不正アクセスを防止するためのファイヤーウォール等のセキュリティ手段によって保護されております。

しかしながら、個人情報やプライバシー情報が当社グループの関係者や業務提携先の故意又は過失により、外部へ流出もしくは悪用される事態が発生した場合や、欧州連合の一般データ保護規則（GDPR）に意図せず違反した場合には、当社グループが損害賠償を含む法的責任を追及される可能性があるほか、当社グループ並びに運営サービスの信頼性やブランドが毀損し、当社グループの事業及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

知的財産権の侵害等について

当社グループは、運営する事業に関する知的財産権の保護に努めております。第三者の知的財産権の侵害を防ぐ体制として、社内で侵害の有無について確認を行った上で、必要に応じて顧問弁護士及び弁理士と連携を取って可能な限り知的財産権侵害・被害等のリスクを軽減すべく活動しております。

しかしながら、万が一、当社グループが第三者の知的財産権を侵害した場合には、第三者から損害賠償請求や使用差止請求等の訴えを起こされる可能性があり、これらに対する支払いが発生する可能性があります。また、当社グループが保有する知的財産権について、第三者により侵害される可能性があるほか、当社グループが保有する知的財産の法的権利化ができない場合、当社グループの事業及び経営成績に重要な影響を及ぼす可能性があります。

(5) 事業運営体制に関するリスクについて

小規模組織であることについて

当社グループは、2025年9月30日現在において提出会社の取締役6名（うち、非常勤監査等委員3名）、執行役員7名（うち、取締役兼任2名）及び従業員329名（執行役員除く）と小規模な組織であり、業務執行体制もこれに応じたものになっております。

当社グループは、今後の急速な事業の拡大に応じて社員の育成、人財の採用を行うとともに、業務執行体制の充実を図っていく方針であります。これらの施策が適時適切に進行しなかった場合、あるいは役員及び社員が予期せず退任又は退職した場合には、当社グループの事業及び業績に影響を及ぼす可能性があります。

人財の確保及び育成について

当社グループは、今後想定される事業拡大や新規事業の展開に伴い、継続した人財の確保が必要であると考えております。特に新規事業を立ち上げ、拡大・成長させていくための事業開発力・マネジメント能力を有する人財や、システム技術分野のスキルを有する人財の確保に努めるとともに、教育体制の整備を進め人財の定着と能力の向上に努める所存であります。

しかしながら、当社グループの求める人財が必要な時期に十分に確保・育成できなかった場合や人財流出が進んだ場合には、経常的な業務運営及び新規事業の拡大等に支障が生じ、当社グループの事業及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

特定の人物への依存について

代表取締役社長執行役員CEOである岩田進は、当社の設立者であるとともに、大株主であり、経営方針や事業戦略の決定において極めて重要な役割を果たしております。

当社グループでは執行役員制度を導入しており、経営監督を担う取締役会と業務執行を担う執行役員の役割を区別していることや、事業運営のための定例会議等における役員及び幹部社員の情報共有や経営組織の強化を図ることで、同氏に過度に依存しない経営体制の整備を進めております。

しかしながら、何らかの理由により同氏が当社グループの業務を継続することが困難となった場合、当社グループの事業及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

内部管理体制の強化について

当社グループでは、企業価値の継続的な増大を図るにはコーポレート・ガバナンスが有効に機能することが不可欠であると認識しております。

業務の適正性及び財務報告の信頼性の確保のための内部統制システムの適切な運用、さらに健全な倫理観に基づく法令遵守を徹底してまいりますが、事業の急速な拡大により、十分な内部管理体制の構築が追いつかない状況が生じる場合には、適切な業務運営が困難となり、当社グループの事業及び経営成績に影響を与える可能性があります。

(6) 災害・紛争・事故等に関するリスクについて

地震や台風等の自然災害や大規模な事故、国際紛争等が発生した場合には、当社グループの事業運営に深刻な影響を及ぼす可能性があります。

当社グループは、このような事態に備え、定期的なバックアップや稼働状況の監視によりシステムトラブルの未然防止や回避及び速やかな復旧体制の構築に努めておりますが、各種災害等の発生による影響を完全に防止できる保障はなく、地震等の大規模災害の発生や事故により本社及びデータセンターが被害を受けた場合、当社グループが提供する事業の継続に支障をきたし、当社グループの事業及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

4【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下、「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

財政状態及び経営成績の状況

当連結会計年度におけるわが国経済は、インバウンド需要の拡大や雇用・所得環境に改善が見られ、緩やかな回復が続くことが期待されております。一方で、不安定な国際情勢を背景とした原材料価格・エネルギー価格の高騰や急激な為替変動等による景気への影響が懸念される等、依然として先行き不透明な状況が続いております。

一方、当社グループが事業を展開している国内のインターネット広告市場については、社会のデジタル化を背景に2024年のインターネット広告費は前年比109.6%の3兆6,517億円（㈱電通「2024年日本の広告費」）と継続的に高い成長率を維持しており、総広告費に占める割合も47.6%まで拡大しております。

また、当社グループのもう一つの対面市場であるEC市場については、2024年国内BtoC-EC市場規模は前年比105.1%の26.1兆円となりました。分野別では、物販系分野に関して前年比103.7%と伸長しており、物販系分野におけるEC化率についてもBtoC-ECで9.8%（前年比0.4ポイント増）と伸長しております。BtoB-EC市場におけるEC化も43.1%（前年比3.1ポイント増）と増加傾向にあり（いずれも経済産業省「令和6年度電子商取引に関する市場調査報告書」）、国内のEC市場規模拡大は継続しております。

このような事業環境の下、当社グループは、データとテクノロジーによって世界中の企業によるマーケティング活動を支援し、売り手と買い手の幸せをつくる企業を目指して事業展開を行っております。当連結会計年度においては、マーケティングDX支援事業、コマース支援事業、両セグメントの売上高増加により増収となり、売上高4,934,733千円（前期比35.7%増）、営業利益278,892千円（前期比69.6%増）、経常利益279,654千円（前期比72.5%増）となりましたが、㈱トピカに係るのれんの償却額、ルビー・グループ㈱に係るのれん等の減損による特別損失を計上したことにより、親会社株主に帰属する当期純損失は142,198千円（前期は68,767千円の純利益）となりました。

セグメントごとの経営成績は以下のとおりとなりました。

（マーケティングDX支援事業）

当事業は、インターネットにおける消費者行動を横断的に測定し、マーケティングに活用するためのクラウドサービス等を提供する事業であります。当事業では、2024年9月期を開始年度とする中期経営方針「VISION2027」の戦略として、広告効果測定におけるクロスセルを強化し、新たなSaaSの提供開始・人的支援サービスの強化後、これら3つを掛け合わせたクロスセルを強化し、2027年9月期までに過去最高件数を更新することを目指しております。提供しているサービスは広告効果測定プラットフォーム「アドエビス」を主力サービスとし、分析レポート自動作成サービス「アドレボ」を提供する広告代理店向けプラットフォームビジネスやインキュベーション領域として新サービスの開発にも取り組んでおります。

当連結会計年度においては、中期経営計画「VISION2027」の戦略の一つである新たなSaaSとして、2025年5月に国内初のマーケティング・キャンペーン・マネジメント・プラットフォーム「アドエビスキャンペーンマネージャー」の正式版の提供を開始いたしました。長年「アドエビス」を提供する中で見えてきた「マーケティング施策の効果改善サイクルを回したい」という顧客課題を、マーケティング施策のPDCAを構造化・効率化することや、過去施策を学習した生成AIによって次回施策の改善提案を提示すること等によって解決を図ってまいります。これにより、当事業の支援範囲を広告効果測定領域からマーケティングプロセス全体へ拡大いたしました。

この結果、当連結会計年度の売上高は2,923,546千円（前期比2.2%増）、セグメント利益は272,683千円（前期比80.6%増）となりました。主力サービスである「アドエビス」の売上高が伸長したこと等により、増収増益となりました。また、「Growth Step Program」や「CAPiCO」を軸として契約件数の増加に取り組んだ結果、契約件数については前連結会計年度末から増加となっております。

（コマース支援事業）

当事業は、EC構築のためのオープンプラットフォーム「EC-CUBE」及びEC構築・運用フェーズを軸として、集客・物流に至るまで、EC事業者が直面する課題に対して支援サービスを提供する事業であります。

オープンプラットフォーム「EC-CUBE」はフリーミアムモデルのオープンソース・パッケージとして提供しており、「EC-CUBE」と連携する各種サービス（決済代行等）の提供事業者から決済手数料収入を得るというエコシステムを構築しております。

一方、EC構築領域においては大規模ECサイトを中心としたEC構築を行うとともに、「EC-CUBE Enterprise」として大規模ECサイトに必要とされる高アクセスに耐えるインフラ基盤・モール型EC・多言語対応等の機能をパッケージとして用意し、コストパフォーマンスに優れた高可用性システムとして大型案件の獲得に取り組んでおります。また、EC運用支援領域においては、前連結会計年度末に連結対象となったルビー・グループ(株)において、ECサイトの運用支援事業やフルフィルメントサービスの提供を行っております。

当連結会計年度においては、EC構築領域では、引き続き大規模EC構築案件の受注獲得に注力しながら、開発内製化の拡大を含む開発体制拡充に取り組んでまいりました。営業面においては新規獲得や既存顧客からの追加受注等の事業進捗があった一方で、体制拡充に伴う採用費等の経費が先行する状況にあります。また、ルビー・グループ(株)においては経営管理体制の見直し等による収益改善等に着手しており、その成果が少しずつ現れてきている状況であります。

この結果、当連結会計年度の売上高は2,017,691千円（前期比159.2%増）、セグメント利益は6,209千円（前期比17.0%減）となりました。EC構築事業の増収により売上は伸長しているものの、EC構築事業に係る外注費の増加や利益率の高い決済手数料収入の減収に伴い、セグメント利益については減益となりました。

なお、新規EC構築案件の受注に注力したことにより、当連結会計年度の受注高は928,248千円（前期比124.8%増）となり、期末受注残高は485,947千円（前期末比335.9%増）となりました。

また、財政状態については次のとおりとなりました。

（資産）

当連結会計年度末における流動資産は2,401,766千円となり、前連結会計年度末に比べ161,592千円増加いたしました。これは主に現金及び預金が151,225千円、受取手形及び売掛金が138,918千円それぞれ増加し、未収入金が154,026千円減少したことによるものであります。

また、固定資産は803,324千円となり、前連結会計年度末に比べ480,947千円減少いたしました。これは主に減損損失の計上や償却等によりのれんが372,385千円、ソフトウェアが82,032千円それぞれ減少したことによるものであります。

この結果、総資産は3,205,091千円となり、前連結会計年度末に比べ319,355千円減少いたしました。

（負債）

当連結会計年度末における流動負債は1,103,974千円となり、前連結会計年度末に比べ18,868千円減少いたしました。これは主に返済により1年内返済予定の長期借入金が89,949千円減少したことによるものであります。

また、固定負債は416,315千円となり、前連結会計年度末に比べ50,301千円減少いたしました。これは主に返済により長期借入金74,969千円減少したことによるものであります。

この結果、負債合計は1,520,289千円となり、前連結会計年度末に比べ69,169千円減少いたしました。

（純資産）

当連結会計年度末における純資産は1,684,802千円となり、前連結会計年度末に比べ250,185千円減少いたしました。これは主に親会社株主に帰属する当期純損失142,198千円の計上及び剰余金の配当48,065千円によるものであります。

この結果、自己資本比率は51.8%（前連結会計年度は53.3%）となりました。

キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末における現金及び現金同等物（以下、「資金」という）は、前連結会計年度末と比べ136,749千円増加（前期は50,412千円減少）し、1,461,669千円となりました。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動によるキャッシュ・フローについては、590,444千円の収入（前期は386,259千円の収入）となりました。これは主に、税金等調整前当期純損失60,594千円（前期は159,569千円の純利益）を計上した一方で、減損損失219,495千円（前期は2,779千円）、のれん償却額（特別損失）98,808千円（前期は該当なし）、減価償却費198,263千円（前期は175,002千円）、のれん償却額106,067千円（前期は122,224千円）を計上したことによるものであります。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動によるキャッシュ・フローについては、188,138千円の支出（前期は489,394千円の支出）となりました。これは主に、無形固定資産の取得による支出147,359千円（前期は141,304千円の支出）や、有形固定資産の取得による支出20,804千円（前期は14,232千円の支出）によるものであります。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動によるキャッシュ・フローについては、264,204千円の支出（前期は53,967千円の収入）となりました。これは主に、長期借入金の返済による支出164,918千円（前期は270,198千円の支出）や、連結の範囲の変更を伴わない子会社株式の取得による支出51,240千円（前期は7,750千円の支出）によるものであります。

生産、受注及び販売の状況

a．生産実績

当連結会計年度における生産実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2024年10月1日 至 2025年9月30日)	
	生産高(千円)	前年同期比(%)
マーケティングDX支援事業	-	-
コマース支援事業	366,679	143.8
調整額	-	-
合計	366,679	143.8

(注) 1．マーケティングDX支援事業は受注生産形態をとらない事業のため、生産の規模を金額あるいは数量で示すことがないため、記載しておりません。

2．金額は、製造原価により算出しております。

b．受注実績

当連結会計年度における受注実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメント名称	当連結会計年度 (自 2024年10月1日 至 2025年9月30日)			
	受注高(千円)	前年同期比(%)	受注残高(千円)	前年同期比(%)
マーケティングDX支援事業	-	-	-	-
コマース支援事業	928,248	224.8	485,947	435.9
調整額	-	-	-	-
合計	928,248	224.8	485,947	435.9

(注) マーケティングDX支援事業は受注生産形態をとらない事業のため、受注の規模を金額あるいは数量で示すことがないため、記載しておりません。

c．販売実績

当連結会計年度における販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2024年10月1日 至 2025年9月30日)	
	販売高(千円)	前年同期比(%)
マーケティングDX支援事業	2,923,546	102.2
コマース支援事業	2,017,691	259.2
調整額	6,505	-
合計	4,934,733	135.7

(注) 調整額は、セグメント間取引消去額であります。

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

財政状態及び経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

a. 財政状態の分析

(資産の分析)

当連結会計年度末における資産の合計は3,205,091千円となり、前連結会計年度末に比べ319,355千円減少いたしました。

当連結会計年度末における流動資産は2,401,766千円となり、前連結会計年度末に比べ161,592千円増加いたしました。これは主に現金及び預金が151,225千円、受取手形及び売掛金が138,918千円それぞれ増加し、未収入金が154,026千円減少したことによるものであります。また、固定資産は803,324千円となり、前連結会計年度末に比べ480,947千円減少いたしました。これは主に減損損失の計上や償却等によりのれんが372,385千円、ソフトウェアが82,032千円それぞれ減少したことによるものであります。

なお、セグメント毎の内訳については、マーケティングDX支援事業が2,367,759千円、コマース支援事業が839,560千円であります。

(負債の分析)

当連結会計年度末における負債の合計は1,520,289千円となり、前連結会計年度末に比べ69,169千円減少いたしました。

当連結会計年度末における流動負債は1,103,974千円となり、前連結会計年度末に比べ18,868千円減少いたしました。これは主に未払金が130,258千円減少し、買掛金が99,589千円増加したことによるものであります。

また、固定負債は416,315千円となり、前連結会計年度末に比べ50,301千円減少いたしました。これは主に返済により長期借入金が74,969千円減少したことによるものであります。

(純資産の分析)

当連結会計年度末における純資産合計は1,684,802千円となり、前連結会計年度末に比べ250,185千円減少いたしました。これは主に親会社株主に帰属する当期純損失142,198千円の計上及び剰余金の配当48,065千円によるものであります。

この結果、自己資本比率は51.8%（前連結会計年度末は53.3%）となりました。

b. 経営成績の分析

当連結会計年度における経営成績の概要については、「第2 事業の状況 4 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 (1) 経営成績等の状況の概要 財政状態及び経営成績の状況」に記載のとおりであります。連結損益計算書の主要項目ごとの前連結会計年度との主な増減要因等は次のとおりであります。

(売上高、営業利益)

当連結会計年度の売上高は4,934,733千円（前年同期比35.7%増）、売上総利益は2,566,367千円（前期比21.1%増）営業利益は278,892千円（前期比69.6%増）となりました。

セグメント別の売上高は、マーケティングDX支援は主力サービスである「アドエビス」の売上高が伸長したことにより売上高は2,923,546千円（前期比2.2%増）となりました。

また、コマース支援事業については、前連結会計年度末に連結対象となったルビー・グループ㈱の業績が通期で寄与し、売上高は2,017,691千円（前期比159.2%増）となりました。

(経常利益)

当連結会計年度の営業外収益は、消費税の還付13,276千円、開発支援金6,873千円、受取利息及び配当金5,488千円、持分法による投資利益3,340千円等を計上したことにより33,212千円（前期比156.3%増）となりました。また、営業外費用は上場関連費用11,110千円、借入金に係る支払利息7,461千円、固定資産除却損7,150千円等を計上したことにより32,451千円（前期比112.9%増）となりました。この結果、経常利益は279,654千円（前期比72.5%増）となりました。

(親会社株主に帰属する当期純損失)

当連結会計年度の税金等調整前当期純損失は、(株)トピカに係るのれんの償却額、ルビー・グループ(株)に係るのれん等の減損による特別損失を計上したことにより60,594千円(前期は159,569千円の純利益)となりました。また、親会社株主に帰属する当期純損失は142,198千円(前期は68,767千円の純利益)となりました。

キャッシュ・フローの状況の分析・検討内容並びに資本の財源及び資金の流動性に係る情報

キャッシュ・フローの分析については、「第2 事業の状況 4 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 (1) 経営成績等の状況の概要 キャッシュ・フローの状況」に記載のとおりであります。

また、当社グループの資本の財源については、営業活動によるキャッシュ・フロー及び金融機関からの借入れによる資金調達によっております。今後の資金需要のうち主なものはM&A資金及びシステム開発等にかかる設備投資等によるものであります。

なお、当連結会計年度末における借入金の残高は679,413千円(前期比28.1%減)であり、現金及び現金同等物の残高は1,461,669千円(前期比10.3%増)となっております。

重要な会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されております。これらの連結財務諸表の作成にあたっては、経営者による会計方針の選択・適用、資産・負債及び収益・費用の報告数値に影響を与える見積りを必要とします。経営者は、過去の実績等を勘案して合理的な見積りを行っておりますが、見積り特有の不確実性があるため、実際の結果は、これらの見積りと異なる場合があります。連結財務諸表の作成にあたって用いた会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定のうち、重要なものについては、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項(重要な会計上の見積り)」に記載のとおりであります。

また、当社グループの連結財務諸表の作成に際して採用している重要な会計方針は、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)」に記載しております。

経営方針、経営戦略、経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

当社グループでは、中期経営方針「VISION2027」において成長投資を実施しながら売上・利益ともに成長を目指すことを基本方針に掲げており、生成AIをはじめとする先端テクノロジーへの投資を継続し、新たな収益の柱を構築することで、「コマースAI事業」及び「マーケティングAI事業」の拡大を通じて成長を加速させてまいります。

重視する経営指標としては従来より売上高及び営業利益をあげておりますが、これらに加えて、資本コストや株価を意識した経営の実現に向け、ROE10%超を重視する経営指標に加えております。

5【重要な契約等】

(株)トピカ株式追加取得のための株式譲渡契約)

当社の連結子会社である(株)トピカの株式を3名の株主から追加取得することを決議し、2024年12月16日付で株式譲渡契約を締結し、2024年12月25日付で株式を取得いたしました。

6【研究開発活動】

該当事項はありません。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当連結会計年度におきましては、事業規模の拡大等の観点から、総額192,852千円の設備投資を実施しております。なお、有形固定資産の他、無形固定資産への投資を含めて記載しております。

(1) マーケティングDX支援事業

当連結会計年度の主な設備投資は、広告効果測定プラットフォーム「アドエビス」の新機能開発による社内利用ソフトウェア等の増加46,282千円、「アドエビスキャンペーンマネージャー」の新機能開発による社内利用ソフトウェア等の増加22,589千円及び「アドレボ」の新機能開発による社内利用ソフトウェア等の増加21,689千円であります。

なお、当連結会計年度において、98,808千円ののれんの一括償却処理を実施しました。のれん一括償却処理の詳細につきましては、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等（1）連結財務諸表 注記事項（連結損益計算書関係） 4 のれん償却額」をご参照ください。

(2) コマース支援事業

当連結会計年度の主な設備投資は、ECプラットフォームである「EC-CUBE」の新機能開発による社内利用ソフトウェア等の増加38,262千円であります。

なお、当連結会計年度において、219,495千円の減損処理及び21,944千円の固定資産除却処理を実施しました。減損処理及び固定資産除却処理の詳細につきましては、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等（1）連結財務諸表 注記事項（連結損益計算書関係） 3 減損損失、 5 固定資産除却損」をご参照ください。

2【主要な設備の状況】

(1) 提出会社

2025年9月30日現在

事業所名 （所在地）	セグメント の名称	設備の内容	帳簿価額（千円）				従業員数 （名）
			建物	工具、器具 及び備品	ソフト ウェア	合計	
大阪本社 （大阪市北区）	マーケティングDX 支援事業 全社（共通）	サービス提 供設備 業務施設等	14,682	28,198	265,805	308,687	67
東京本社 （東京都千代田区）	マーケティング DX支援事業 全社（共通）	業務施設等	16,278	3,543	－	19,822	74

（注）1．現在休止中の主要な設備はありません。

2．上記「工具、器具及び備品」のうち、サービス提供用サーバ設備等の保管場所は、大阪市北区に賃借しております。

3．上記のほか、主要な賃借設備として、以下のものがあります。

事業所名 （所在地）	セグメント の名称	設備の内容	床面積（㎡）	年間賃借料 （千円）
大阪本社 （大阪市北区）	マーケティングDX支援事業 コマース支援事業 全社（共通）	本社機能	296.28	26,889
東京本社 （東京都千代田区）	マーケティングDX支援事業 全社（共通）	本社機能	406.64	44,283

(2) 国内子会社

2025年9月30日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の 内容	帳簿価額(千円)				従業員数 (名)
				建物	工具、器具 及び備品	ソフト ウェア	合計	
(株)イーシーキューブ	大阪本社 (大阪市北区)	コマース 支援事業	開発業務 施設等	-	1,372	84,090	85,462	17
(株)イーシーキューブ	東京本社 (東京都千代田区)	コマース 支援事業	開発業務 施設等	-	1,526	-	1,526	24

(注) 現在休止中の主要な設備はありません。

(3) 在外子会社

該当事項はありません。

3【設備の新設、除却等の計画】

(1) 重要な設備の新設等

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の 内容	投資予定額		資金調達 方法	着手 年月	完成 年月	完成後の 増加能力
				総額 (千円)	既支払額 (千円)				
(株)イルグルム	大阪本社 (大阪市北区)	マーケティングDX支援事業	サービス提供 用ソフトウェア	119,200	-	自己資金	2025年 10月	2026年 9月	(注)
(株)イーシーキューブ	大阪本社 (大阪市北区)	コマース支援 事業	サービス提供 用ソフトウェア	23,607	-	自己資金	2025年 10月	2026年 9月	(注)

(注) 完成後の増加能力については、計数的な把握が困難なため、記載を省略しております。

(2) 重要な設備の除却等

経常的な設備の更新のための除却等を除き、重要な設備の除却等の計画はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	22,800,000
計	22,800,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数 (株) (2025年9月30日)	提出日現在発行数 (株) (2025年12月16日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	6,372,415	6,372,415	東京証券取引所 (スタンダード市場)	単元株式数 100株
計	6,372,415	6,372,415	-	-

(注) 2025年8月21日付けで、当社株式は東京証券取引所グロース市場から同取引所スタンダード市場に市場変更いたしました。

(2)【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金 増減額 (千円)	資本金 残高 (千円)	資本準備金 増減額 (千円)	資本準備金 残高 (千円)
2019年2月18日	19,900	6,372,415	11,293	318,065	11,293	308,043

(注) 譲渡制限付株式報酬としての新株式の発行による増加であります。

発行価格 1,135円

資本組入額 567.5円

割当先 取締役(監査等委員である取締役3名を含む)5名

取締役を兼務しない執行役員4名

従業員8名

子会社の取締役1名

(5) 【所有者別状況】

2025年 9月30日現在

区分	株式の状況 (1単元の株式数100株)							単元未満株式の状況 (株)
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計
					個人以外	個人		
株主数 (人)	-	1	15	45	11	53	9,636	9,761
所有株式数 (単元)	-	38	366	1,057	391	118	61,691	63,661
所有株式数の割合 (%)	-	0.06	0.57	1.66	0.61	0.19	96.91	100.00

(注) 自己株式172,835株は、「個人その他」に1,728単元、「単元未満株式の状況」に35株含まれております。

(6) 【大株主の状況】

2025年 9月30日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (株)	発行済株式 (自己株式を除く。) の総数に対する所有株式数の割合 (%)
岩田 進	京都市上京区	2,640,807	42.59
福田 博一	兵庫県西宮市	770,900	12.43
又座 加奈子	東京都中央区	329,200	5.31
山下 良久	大阪市中央区	67,700	1.09
イルグルム従業員持株会	大阪市北区梅田二丁目 2 番22号	63,872	1.03
(株)博報堂	東京都港区赤坂五丁目 3 番 1 号	60,000	0.96
山田 智則	東京都品川区	53,000	0.85
中川 仁	兵庫県宝塚市	29,954	0.48
長野 佳代子	大阪市此花区	23,701	0.38
(株)アイレップ	東京都渋谷区恵比寿四丁目20番 3 号	22,000	0.35
計	-	4,061,134	65.50

(注) 当社は自己株式を172,835株保有しておりますが、上記大株主からは除外しております。

(7) 【議決権の状況】

【発行済株式】

2025年 9月30日現在

区分	株式数 (株)	議決権の数 (個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式 (自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式 (その他)	-	-	-
完全議決権株式 (自己株式等)	普通株式 172,800	-	-
完全議決権株式 (その他)	普通株式 6,193,300	61,933	-
単元未満株式	普通株式 6,315	-	-
発行済株式総数	6,372,415	-	-
総株主の議決権	-	61,933	-

(注) 「単元未満株式」欄の普通株式には、当社所有の自己株式35株が含まれております。

【自己株式等】

2025年9月30日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義所有 株式数（株）	他人名義所有 株式数（株）	所有株式数の 合計（株）	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合（％）
㈱イルグルム	大阪市北区梅田二丁目2番22号	172,800	-	172,800	2.71
計	-	172,800	-	172,800	2.71

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第13号による普通株式の取得

（１）【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

（２）【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

（３）【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数（株）	価額の総額（千円）
当事業年度における取得自己株式	2,900	-
当期間における取得自己株式	-	-

（注）１．当期間における取得自己株式には、2025年12月１日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

２．当事業年度における取得自己株式は、譲渡制限付株式の無償取得によるものです。

（４）【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数（株）	処分価額の総額 （千円）	株式数（株）	処分価額の総額 （千円）
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	-	-	-	-
消却の処分を行った取得自己株式	-	-	-	-
合併、株式交換、株式交付、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	-	-	-	-
その他（注）１	40,200	22,110	-	-
保有自己株式数	172,835	-	172,835	-

（注）１．当事業年度の内訳は、2025年1月17日開催の取締役会において決議された譲渡制限付株式報酬の割当（株式数40,200株、処分価額の総額22,110千円）であります。

２．当期間における保有自己株式数には、2025年12月１日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

3【配当政策】

当社は、株主の皆様に対する利益還元を経営の重要課題と認識しており、今後の業績の推移や財務状況等を考慮したうえで、将来の事業展開のための投資と健全な内部留保等を総合的に勘案しながら、当連結会計年度においては連結株主資本配当率2.5%を目安に安定的かつ継続的な配当を行うことを基本方針としております。また、自己株式の取得については、株主価値の最大化を目的とした機動的な資本政策を実行可能とするため、必要に応じて実施することとしております。

当社の剰余金の配当は、中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うことができる旨を定款に定めておりますが、現時点では期末配当の年1回を基本的な方針としております。これらの剰余金の配当の決定機関は、取締役会であります。なお、当社は会社法第459条第1項の規定に基づき、取締役会の決議によって剰余金の配当を行うことができる旨を定款に定めております。

当連結会計年度においてはのれん減損等の特別損失を計上したものの経常利益については当初計画を上回ることとなったため、当事業年度の期末配当金については2025年1月17日付で公表した配当予想を維持し、1株当たり7.9円（連結株主資本配当率2.8%）とさせていただきます。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は、以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額（千円）	1株当たり配当額（円）
2025年11月14日 取締役会決議	48,976	7.90

4【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1)【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、企業価値を向上させ、長期的な競争力の維持向上を図るため、コーポレート・ガバナンスを経営上の極めて重要な課題の一つと認識しております。また、更なる事業拡大のためには株主、顧客、仕入先、従業員への情報開示が必要と認識しており、企業価値の向上を目指す上で法令遵守、企業としての社会的責任の重要性を認識し、全てのステークホルダーに対する社会的責任を果たしつつ、効率経営を推進し、高収益体質を構築することが重要であると考えております。情報開示につきましては、自主的な情報発信に努めることによって透明性の高い経営を実践してまいります。

企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

当社は、経営における監督と執行の分離をより明確化すると同時に、取締役会の権限のうち重要な業務執行の決定を取締役に委任することで迅速な意思決定を可能とするために、監査等委員会設置会社制度を採用しております。企業統治の体制の概要は以下のとおりであります。

イ．取締役会・取締役体制

取締役会は、月に1回の定時取締役会に加え、必要に応じて臨時取締役会を開催しております。取締役会は定款及び法令に則り、法的決議事項及び経営方針等の経営に関する重要事項の意思決定を行うほか、取締役の業務執行の監督を行っております。また、議長は代表取締役であります。

提出日（2025年12月16日）現在において、当社の取締役は、監査等委員である取締役以外の取締役3名、監査等委員である取締役3名（うち社外取締役3名）の計6名で構成されております。

取締役会の構成員は以下のとおりです。

イ）取締役（監査等委員である取締役を除く）

岩田進取締役、赤澤洋樹取締役、椎木茂取締役

ロ）監査等委員である社外取締役

佐伯壽一取締役、西野充取締役、大久保丈二取締役

なお、当社は2025年12月19日開催予定の定時株主総会の議案（決議事項）として、「監査等委員である取締役以外の取締役5名選任の件」及び「監査等委員である取締役1名選任の件」を予定しており、当該議案が承認可決されると、当社の取締役は、監査等委員である取締役以外の取締役は岩田進、赤澤洋樹、椎木茂、川原均、藤田明久の5名（川原均、藤田明久の2名は社外取締役）、監査等委員である取締役は佐伯壽一、西野充、若松典子の3名（全て社外取締役）となる予定であります。

当事業年度において、当社は取締役会を計17回開催しており、個々の取締役の出席状況については次のとおりであります。

氏名	開催回数	出席回数
岩田 進	17回	17回
赤澤 洋樹	17回	17回
椎木 茂	17回	16回
佐伯 壽一	17回	17回
西野 充	17回	17回
大久保 丈二	17回	17回

（注） 上記の取締役会の開催回数のほか、会社法第370条及び当社定款第25条の規定に基づき、取締役会決議があったものとみなす書面決議が2回ありました。

ロ．監査等委員会

監査等委員会は3名の監査等委員である取締役（全て非常勤）で構成されております。監査等委員である取締役は、月に1回の定時監査等委員会に加え、必要に応じて臨時監査等委員会を開催しております。監査等委員会では、定款及び法令に則り重要事項の決議及び業務の進捗報告等を行います。また、取締役会及び経営会議その他の重要会議への出席または議事録の閲覧により、公正な監査・監督体制をとっております。このほか、内部監査室及び会計監査人と連携をとり、年度監査計画に基づいて監査を実施しております。

なお、当社は2025年12月19日開催予定の定時株主総会の議案（決議事項）として「監査等委員である取締役1名選任の件」を予定しております。当該議案が承認可決されますと、監査等委員である取締役は佐伯壽一、西野充、若松典子の3名（全て非常勤）で構成される予定であります。

提出日（2025年12月16日）現在の、監査等委員会の構成員は以下のとおりです。

なお、当社には常勤監査等委員は選任しておりませんが、監査等委員は月2回開催している経営会議の議事録を閲覧し、業務執行状況の把握を行っております。

イ）監査等委員（非常勤、委員長）

西野充取締役

ロ）監査等委員（非常勤）

佐伯壽一取締役、大久保丈二取締役

ハ．その他

当社は執行役員制度を導入し、業務の執行と監督を分離することで取締役会をスリム化し、経営の効率化と迅速化を図っております。経営会議は、執行役員7名（うち取締役を兼務する者2名）で構成され、原則として月2回定期開催しております。経営会議では、経営に関する重要な事項を迅速に審議決定し、経営活動の効率化を図り、併せて重要な日常業務の報告を実施しております。

加えて、これらの機関のほかに、コンプライアンス委員会、情報セキュリティ委員会及び内部監査室を設置しております。これら各機関の相互連携により、経営の健全性、効率性及び透明性が確保できるものと認識しております。

コンプライアンス委員会は社長執行役員を委員長とし、その他委員長が必要と認めたもので構成され、年1回の定期開催のほか、必要な場合に随時開催することとなっております。コンプライアンス委員会では、当社のコンプライアンス体制の構築・維持・管理に関する指導、法令遵守等の実施状況のモニタリング、当社役職員に対するコンプライアンスについての研修・啓発活動の協議等を行っております。

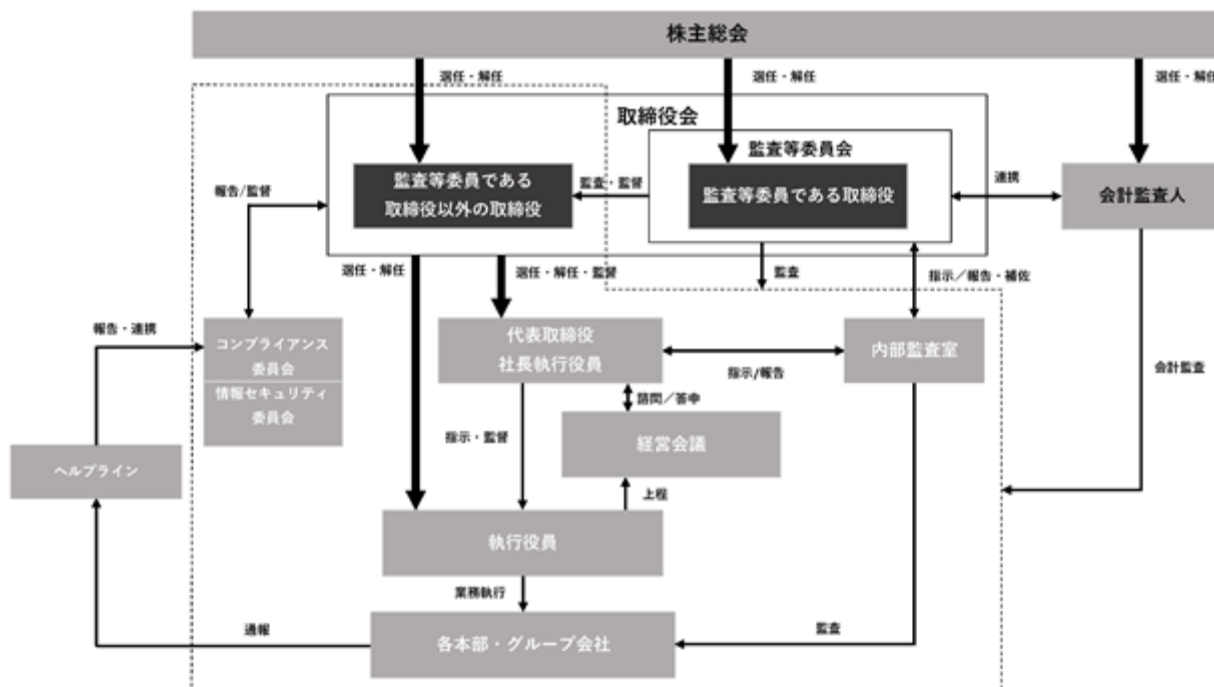
情報セキュリティ委員会は社長執行役員を委員長とし、その他委員長が必要と認めたもので構成され、必要に応じて随時開催しております。情報セキュリティ委員会では、情報セキュリティの確保に向けて具体的対策を実施するとともに、新たに発生するリスクに対して迅速な対策の構築・維持・管理を行い、当社役職員に対する情報セキュリティについての研修・啓発活動の協議等を行っております。

当社では、これまで一貫してコーポレート・ガバナンスの質を高めるための様々な施策に取り組んできましたが、より迅速な意思決定による効率的・機動的な業務執行を行えるようにするとともに、業務執行者を監督する機能を更に強化することが必要であると考えております。執行役員制度を導入して執行役員への権限委譲を行うとともに、社外取締役の豊富な経験や幅広い見識を活用することで取締役会の監督機能を強化しており、より監督と業務執行の分離を進めることができる監査等委員会設置会社制度を採用しております。

(会社の機関・内部統制の関係図)

当社の会社機関及びコーポレート・ガバナンスの体制を図示しますと、以下のとおりであります。

(提出日現在)



企業統治に関するその他の事項

(内部統制システムの整備の状況)

当社は、取締役会において、以下のとおり内部統制システム構築の基本方針を定め、業務の有効性、効率性及び適正性を確保する体制を構築しております。

イ．取締役の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

イ) 取締役会は、すべての取締役で構成し、法令に定める職務のほか、経営の基本方針・戦略その他重要な業務執行の決定を行う。取締役会は、業務執行の法令・定款への適合性を確保するため、原則として毎月開催する。

ロ) 経営に関する重要な事項については、経営会議において十分な議論を行った後に取締役会において審議・決定する。

ハ) 監査等委員は、監査等委員会が定めた監査等委員会監査基準に基づき、取締役会及び経営会議その他の重要な会議への出席または議事録閲覧、会社業務及び財産の状況の調査等を通じ、取締役の職務執行を監査する。

ロ．取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

会社は、その担当職務の執行に係る以下の文書（電磁的記録を含む）を、関連資料と併せて最低10年間保管し、取締役及び監査等委員は随時これらの文書を閲覧可能なものとする。

- a. 株主総会議事録
- b. 取締役会議事録
- c. 重要な会議及び委員会の議事録

ハ．当社及び当社子会社の損失の危険の管理に関する規程その他の体制

イ) 取締役会は、経営危機管理規程を当社及び当社子会社の損失の危険に関する統括的規程とする。

ロ) 関係会社管理規程に基づき、子会社ごとに当社執行役員を統括責任者として定める。統括責任者は、所管する子会社のリスク把握・防止を含む管理指導を行い、当該子会社は必要な検討・対応を行う。

ハ) 会社は、事業活動に伴う各種リスクについて、各主管部署を通じてリスク管理に関する規程を定め、教育・啓発を通じてその維持・定着とリスク低減を図る。

二) 大規模災害等の重大な事態が発生した場合は、社長執行役員を本部長とする緊急事態対策本部を設置し、事業継続のためのリスク管理、並びに損失最小化を目的として迅速に情報を収集・分析し、必要な対策を講じる。

- ホ) コンプライアンスリスクに対処するため、以下の施策を講じる。
- ア. 弁護士事務所と顧問契約を締結し、重要な法律問題について助言を受け、法的問題の予防・軽減に努める。
 - イ. コンプライアンス委員会規程に基づき、社長執行役員を委員長とするコンプライアンス委員会を常設し、コンプライアンスリスクの予防・拡大防止を図る。
- ヘ) 情報セキュリティ基本規程を定め、社長執行役員を委員長とする情報セキュリティ委員会が、情報セキュリティに係るリスクの把握、対策立案、実行管理と改善を行う。
- ニ. 当社及び当社子会社の取締役の職務の執行が効率的に行われていることを確保するための体制
- イ) 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制として、執行役員制度を導入するとともに、定時取締役会を原則毎月開催するほか、必要に応じて臨時取締役会を開催するものとし、経営方針及び戦略にかかわる重要事項については、取締役と執行役員で構成する経営会議において事前審議を行い、業務執行を決定する。
 - ロ) 取締役及び執行役員の業務執行については、取締役会規則、執行役員規程、組織規程、職務権限規程等において、それぞれの責任者及びその権限、執行手続について定める。
- ハ) 当社子会社の取締役の職務の執行については、関係会社管理規程を定め、当社の取締役又は執行役員を統括責任者として派遣し、当該子会社の支援、管理及び監督を行う。
- ホ. 当社子会社の取締役の職務の執行に係る事項の当社への報告に関する事項
- 取締役会は、関係会社管理規程を定め、子会社の営業成績、財務状況その他の重要な事項について、当社への定期的な報告を義務付ける。
- ヘ. 当社使用人並びに当社子会社の取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制
- イ) 当社使用人並びに当社子会社の取締役及び使用人が法令及び諸規則を遵守し、倫理観を持って事業活動を行うための基盤として、倫理規程を定める。
 - ロ) 社長執行役員を委員長とするコンプライアンス委員会を設置し、当社使用人並びに当社子会社の取締役及び使用人の法令遵守意識定着と運用徹底を図るため、教育・啓発等諸活動を実施する。
- ハ) 法令違反行為等に関する通報に対して適切に対処するために、内部通報規程に基づき内部通報制度を整備・運営し、その周知徹底を図る。
- ニ) 監査等委員会は、当社及び当社子会社のコンプライアンス体制及び内部通報制度の運用に問題があるときは、意見を述べるとともに業務執行に係る取締役に対して速やかな改善を求める。
- ト. 監査等委員会の職務を補助すべき使用人に関する体制及び当該使用人の取締役からの独立性に関する事項
- イ) 監査等委員会がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めたときは、会社は当社の使用人から、監査等委員会補助者を任命するものとする。
 - ロ) イ)の使用人の、取締役からの独立性を確保するために、監査等委員会はイ)の使用人人事について、事前に報告を受け、必要な場合は会社に変更を申し入れることができるものとする。
- ハ) イ)の使用人は、その職務に当たっては、監査等委員会の指示にのみ従うものとする。
- チ. 当社及び当社子会社の取締役及び使用人が監査等委員会に報告するための体制及び監査が実効的に行われることを確保するための体制
- イ) 監査等委員は、経営会議等の重要な会議に出席し、当社及び当社子会社の業務執行に関する報告を受けることができる。
 - ロ) 当社及び当社子会社の取締役及び使用人は、当社及び当社子会社の業務又は業績に影響を与える重要な事項がある場合は、監査等委員会に直ちに報告する。監査等委員会は、いつでも必要に応じて、当社及び当社子会社の取締役及び使用人に対して報告を求めることができる。
- ハ) 取締役は、内部通報に関する規程を定め、その適切な運用を維持することにより、コンプライアンス上の問題について監査等委員会が適時に把握できるようにする。
- リ. 監査等委員会に報告した者が当該報告したことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制
- 当社は、監査等委員会へ報告を行った当社及び当社子会社の取締役及び使用人に対し、当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを行うことを禁止し、その旨を当社及び当社子会社の取締役及び使用人に周知徹底する。
- ヌ. 監査等委員の職務の執行について生ずる費用の前払又は償還の手続その他の当該職務の執行について生ずる費用又は債務の処理に関する事項
- 監査等委員がその職務の執行について必要な費用の前払い等の請求をしたときは、当社は速やかに、これに応じるものとする。

ル．監査等委員会の監査が実効的に行われることを確保するための体制

- イ) 代表取締役は、監査等委員会と定期的に会合を持ち、会社が対処すべき課題、監査等委員会の環境整備の状況、監査等委員会の監査上の重要課題等について意見交換を行う。
- ロ) 当社は、監査等委員会が、独自に弁護士との顧問契約を締結し、又は、必要に応じて専門の弁護士、公認会計士の助言を受ける機会を保证する。

ヲ．財務報告の信頼性を確保するための体制

- イ) 当社及び当社子会社は、財務報告の信頼性確保のため、金融商品取引法その他関連法令に従い、財務報告に係る内部統制システムの整備・構築、並びにその有効性・適切性を定期的に評価し、金融商品取引法及び関係法令等との適合性を確保する。
- ロ) 内部監査室は、財務報告に係る内部統制監査を行う。
- ハ) 取締役会は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用に対して監督責任を有し、その整備状況及び運用状況を監視する。

(リスク管理体制の整備の状況)

リスク管理体制は、各執行役員が自己の分掌範囲について責任をもって構築しており、その運用状況は監査等委員会及び内部監査室が監査を行っております。また、法令遵守体制の確立、チェック、社内教育などを目的として、社長執行役員を委員長とするコンプライアンス委員会を設置し、少なくとも年1回以上開催しております。さらに、必要に応じて顧問弁護士、顧問税理士等の社外の専門家にアドバイスやチェックを受けております。なお、社外の専門家にアドバイスやチェックを受ける際には、取締役会にて適切な手続を取っており、アドバイス等の内容については迅速に取締役会に報告しております。

(子会社の業務の適正を確保するための体制整備の状況)

当社は、社内規程に従い、子会社から定期的に報告を求め、子会社のリスク管理体制の構築・運用を推進するとともに、子会社の内部統制システム構築に向けた基本規程の整備を支援する体制としております。

(責任限定契約の内容の概要)

当社は、会社法第427条第1項の規定に基づき、社外取締役との間において、会社法第423条第1項に規定する損害賠償責任を限定する契約を締結することができる旨を定款に定めており、社外取締役の全員と当該契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任限度額は、法令が定める額としております。

(役員等との間で締結している補償契約の内容の概要)

該当事項はありません。

(役員等を被保険者として締結している役員等賠償責任保険契約の概要)

当社は、会社法第430条の3第1項に規定する役員等賠償責任保険契約を保険会社との間で締結し、被保険者が負担することになる株主代表訴訟費用、第三者訴訟費用及びその他付随費用を当該保険契約により填補することとしております。当該保険契約の被保険者の範囲は当社及び子会社の取締役、監査役及び執行役員等であり、被保険者は保険料を負担していません。ただし、被保険者の職務の執行の適正性が損なわれないようにするため、被保険者による犯罪行為に起因する損害賠償金等については、填補の対象としないこととしております。

(取締役の定数)

当会社の取締役は、監査等委員である取締役以外の取締役を5名以内、監査等委員である取締役を4名以内とする旨を定款に定めております。

(取締役の選任及び解任の決議要件)

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨及び累積投票によらない旨を定款に定めております。なお、解任決議については定めておりません。

(取締役会で決議できる株主総会決議事項)

イ．自己株式の取得、剰余金の配当等

当社は、機動的な資本政策及び配当政策を図るため、自己株式の取得や剰余金の配当等会社法第459条第1項各号に定める事項については、法令に別段の定めのある場合を除き、株主総会の決議によらず取締役会決議によることができる旨を定款で定めております。

ロ．取締役の責任免除

当社は、会社法第426条第1項の規定により、任務を怠ったことによる取締役(取締役であった者を含む。)の損害賠償責任を、法令の定める限度において、取締役会の決議によって免除することができる旨を定款に定めております。これは、取締役が期待される役割を十分に発揮すること等を目的とするものであります。

(株主総会の特別決議要件)

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めてお

ります。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(2) 【役員の状況】

2025年12月16日（有価証券報告書提出日）現在の当社の役員の状況は、以下のとおりです。

男性6名 女性 - 名（役員のうち女性の比率 - %）

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
代表取締役 社長執行役員 CEO	岩田 進	1977年 7月16日	2001年 6月 当社設立 代表取締役社長 2018年10月 ㈱イーシーキューブ代表取締役 2019年12月 代表取締役・社長執行役員CEO（現任） 2021年 2月 ㈱スプー取締役 2021年 7月 ㈱トピカ取締役 2022年 2月 ファーエンドテク ノロジー㈱取締役 2023年 9月 ㈱イーシーキューブ代表取締役社長（現任） 2024年 9月 ルビー・グループ㈱代表取締役（現任）	(注) 2	2,640,807
取締役 上席執行役員 CFO	赤澤 洋樹	1974年 5月14日	1999年 4月 秋葉会計事務所入所 2003年 3月 ガイア㈱入社 2006年10月 ㈱日本エスコン（現㈱エスコン入社） 2008年11月 ㈱ユー・エス・ジェイ（現(合)ユー・エス・ジェイ）入社 2016年10月 当社入社 2017年 2月 経営企画部長 2018年 9月 経営管理本部長 2018年10月 執行役員CFO 2020年12月 取締役執行役員CFO 2021年 7月 ㈱トピカ取締役（現任） 2022年 5月 ファーエンドテク ノロジー㈱取締役 2022年10月 当社取締役上席執行役員CFO 2023年 9月 取締役上席執行役員COO兼CFO運営本部本部長兼事業戦略室長 2024年 9月 取締役上席執行役員COO兼CFO ルビー・グループ㈱取締役 2024年10月 当社取締役上席執行役員CSO兼CFO ルビー・グループ㈱取締役執行役員COO（現任） 2025年 4月 当社取締役上席執行役員CFO（現任）	(注) 2	18,480
取締役	椎木 茂	1950年 2月13日	1993年 1月 プライスウォーターハウスコンサルタント㈱パートナー & 常務取締役 2006年 7月 IBMビジネスコンサルティングサービス㈱代表取締役社長兼日本アイ・ピー・エム㈱執行役員GBS担当 2009年 7月 日本アイ・ピー・エム㈱専務執行役員兼IBMビジネスコンサルティングサービス㈱代表取締役社長 2013年 4月 日本オラクル㈱副社長執行役員アプリケーションビジネス統括・アライアンス事業統括 2016年12月 当社取締役（監査等委員） 2017年10月 SAPジャパン㈱ デジタルビジネスサービス事業本部シニアエグゼクティブアドバイザー 2017年12月 当社取締役（現任） 2021年 9月 ㈱アイデミー社外取締役 2023年12月 ㈱イーシーキューブ取締役（現任） 2024年 4月 ELESTYLE㈱社外取締役（現任）	(注) 2	9,404

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役 (監査等委員)	佐伯 壽一	1948年 3 月 1 日	1970年 4 月 (株)神戸製鋼所入社 2001年 6 月 同社理事・大阪支社長 2002年 6 月 神鋼ケアライフ(株) (現スミリンケアライフ(株)) 代表取締役社長 2012年 4 月 国立大学法人神戸大学特命教授・学長補佐 2015年 6 月 (株)淀川製鋼所 (現(株)ヨドコウ) 社外取締役 2016年12月 当社社外取締役 (監査等委員) (現任) 2018年10月 (株)イーシーキューブ監査役 (現任) 2024年 9 月 ルビー・グループ(株)監査役 (現任)	(注) 1、 3	17,404
取締役 (監査等委員)	西野 充	1952年 8 月27日	1975年 4 月 (株)東京銀行 (現(株)三菱UFJ銀行) 入行 2001年 7 月 (株)東京三菱銀行理事 2003年 4 月 同行神戸支社長 2006年 8 月 ペンタックス(株)顧問 2007年 1 月 同社執行役員 2007年 6 月 同社執行役員CSR・内部統制統括部長 2008年 3 月 HOYA(株)監査部ゼネラル・マネージャー 2012年 6 月 旭精機工業(株)社外監査役 2016年12月 当社社外取締役 (監査等委員) (現任) 2016年12月 LOCKON Vietnam Co.,Ltd. (現YRGLM VIETNAM Co., Ltd.) 監査役 (現任) 2020年 6 月 旭精機工業(株)社外取締役 2022年 2 月 ファーエンドテクノロジー(株)監査役 (現任)	(注) 1、 3	12,404
取締役 (監査等委員)	大久保 丈二	1947年 1 月27日	1970年 2 月 プライスウォーター・ハウス公認会計士事務所 1989年 7 月 プライスウォーター・ハウス パートナー 1989年 7 月 青山監査法人代表社員 1992年 7 月 プライスウォーター・ハウスコンサルタント(株)常務取締役 1995年 7 月 同社常務取締役CFO 2002年10月 IBMビジネスコンサルティングサービス(株)常務取締役 2003年 2 月 公認会計士事務所開業 2013年 6 月 (株)シグマクシス (株)シグマクシス・ホールディングス) 社外監査役 2016年 6 月 同社社外取締役 (監査等委員) 2017年12月 当社社外取締役 (監査等委員) (現任) 2021年 2 月 (株)スプー監査役 (現任) 2021年 7 月 (株)トピカ監査役 (現任)	(注) 1、 4	11,404
計					2,709,903

- (注) 1 . 取締役佐伯壽一、西野充及び大久保丈二は監査等委員である社外取締役であります。
- 2 . 2024年12月20日開催の定時株主総会終結の時から 1 年間
- 3 . 2024年12月20日開催の定時株主総会終結の時から 2 年間
- 4 . 2023年12月22日開催の定時株主総会終結の時から 2 年間
- 5 . 当社は、法令に定める監査等委員である取締役の員数を欠くことになる場合に備え、補欠の監査等委員である取締役 1 名を選任しております。補欠の監査等委員である取締役の略歴は次のとおりであります。なお、補欠の監査等委員である取締役は、社外取締役の要件を満たしております。

氏名	生年月日	略歴	所有株式数(株)
遠藤 元一	1957年 5 月25日	1992年 4 月 弁護士登録 (第二東京弁護士会) 1992年 4 月 田邨・大橋・横井法律事務所入所 1993年 4 月 清塚勝久法律事務所 (現東京霞ヶ関法律事務所) 入所 1996年 8 月 同所パートナー 2022年12月 オルトプラス社外取締役 (監査等委員) (現任)	-

- (注) 補欠の監査等委員である取締役の任期は、就任した時から退任した補欠の監査等委員である取締役の任期の満了の時までであります。
- 6 . 当社では、取締役会の一層の活性化を促し、取締役会の意思決定・業務執行の監督機能と各部署の業務執行機能を区分し、経営効率の向上を図るために執行役員制度を導入しております。有価証券報告書提出日時点の取締役を兼ねない執行役員は中川仁 (上席執行役員CTO)、栢木秀樹 (CAO)、吉本啓顕、平田純也及び廣遥馬であります。

2025年12月19日開催予定の定時株主総会の議案（決議事項）として、「監査等委員である取締役以外の取締役5名選任の件」「監査等委員である取締役1名選任の件」及び「補欠の監査等委員である取締役1名選任の件」を上程しており、当該決議が承認可決されますと、当社の役員の状況及びその任期は、以下のとおりとなる予定です。

男性7名 女性1名（役員のうち女性の比率12.5％）

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 （株）
代表取締役 社長執行役員 CEO	岩田 進	1977年7月16日	2001年6月 当社設立 代表取締役社長 2018年10月 ㈱イーシーキューブ代表取締役 2019年12月 代表取締役・社長執行役員CEO（現任） 2021年2月 ㈱スプー取締役 2021年7月 ㈱トピカ取締役 2022年2月 ファーエンドテクノロジー㈱取締役 2023年9月 ㈱イーシーキューブ代表取締役社長（現任） 2024年9月 ルビー・グループ㈱代表取締役（現任）	(注) 3	2,640,807
取締役 上席執行役員 CFO	赤澤 洋樹	1974年5月14日	1999年4月 秋葉会計事務所入所 2003年3月 ガイア㈱入社 2006年10月 ㈱日本エスコン（現㈱エスコン入社） 2008年11月 ㈱ユー・エス・ジェイ（現(合)ユー・エス・ジェイ）入社 2016年10月 当社入社 2017年2月 経営企画部長 2018年9月 経営管理本部長 2018年10月 執行役員CFO 2020年12月 取締役執行役員CFO 2021年7月 ㈱トピカ取締役（現任） 2022年5月 ファーエンドテクノロジー㈱取締役 2022年10月 当社取締役上席執行役員CFO 2023年9月 取締役上席執行役員CFO兼CFO運営本部本部長兼事業戦略室長 2024年9月 取締役上席執行役員CFO兼CFO ルビー・グループ㈱取締役 2024年10月 当社取締役上席執行役員CSO兼CFO ルビー・グループ㈱取締役執行役員CFO（現任） 2025年4月 当社取締役上席執行役員CFO（現任）	(注) 3	18,480
取締役	椎木 茂	1950年2月13日	1993年1月 プライスウォーターハウスコンサルタント㈱パートナー&常務取締役 2006年7月 IBMビジネスコンサルティングサービス㈱代表取締役社長兼日本アイ・ビー・エム㈱執行役員GBS担当 2009年7月 日本アイ・ビー・エム㈱専務執行役員兼IBMビジネスコンサルティングサービス㈱代表取締役社長 2013年4月 日本オラクル㈱副社長執行役員アプリケーションビジネス統括・アライアンス事業統括 2016年12月 当社取締役（監査等委員） 2017年10月 SAPジャパン㈱ デジタルビジネスサービス事業本部シニアエグゼクティブアドバイザー 2017年12月 当社取締役（現任） 2021年9月 ㈱アイデミー社外取締役 2023年12月 ㈱イーシーキューブ取締役（現任） 2024年4月 ELESTYLE㈱社外取締役（現任）	(注) 3	9,404

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役	川原 均	1959年12月11日	1982年4月 日本アイ・ピー・エム㈱入社 2010年1月 同社専務執行役員ソフトウェア事業部長 2011年8月 Berlitz Corporation取締役副社長 2012年11月 ㈱セールスフォース・ドットコム(現㈱セールスフォース・ジャパン)副社長兼エンタープライズ営業本部長 2014年4月 同社取締役社長兼COO 2016年12月 デロイトトーマツコンサルティング(合)副社長 2018年11月 同社経営会議議長 2024年7月 フライシュマン・ヒラード・ジャパン㈱顧問(現任) 2024年9月 ㈱SHIFT顧問(現任) 2025年8月 ㈱日本企業成長投資顧問(現任) 2025年12月 当社社外取締役(現任)	(注) 1、3	-
取締役	藤田 明久	1965年11月17日	1991年4月 ㈱電通入社 1996年7月 ㈱サイバー・コミュニケーションズ(現㈱CARTA COMMUNICATIONS)取締役 2000年6月 ㈱ディーソー コミュニケーションズ(現㈱D2C)代表取締役社長 2010年6月 ㈱電通デジタル・ホールディングス(現㈱電通イノベーションパートナーズ)専務取締役 2014年6月 ㈱ぐるなび代表取締役副社長 2017年6月 ㈱ぱど(現㈱中広メディアソリューションズ)取締役副社長 2018年6月 ㈱瀬戸内ブランドコーポレーション代表取締役社長 2022年6月 インフォコム㈱社外取締役 ㈱ミクシィ(現㈱MIXI)社外取締役(現任) 2023年5月 サインポスト㈱社外取締役(現任) 2024年9月 ㈱リップス社外取締役(現任) 2025年12月 当社社外取締役(現任)	(注) 1、3	-
取締役 (監査等委員)	佐伯 壽一	1948年3月1日	1970年4月 ㈱神戸製鋼所入社 2001年6月 同社理事・大阪支社長 2002年6月 神鋼ケアラライフ㈱(現スミリンケアラライフ㈱)代表取締役社長 2012年4月 国立大学法人神戸大学特命教授・学長補佐 2015年6月 ㈱淀川製鋼所(現㈱ヨドコウ)社外取締役 2016年12月 当社社外取締役(監査等委員)(現任) 2018年10月 ㈱イーシーキューブ監査役(現任) 2024年9月 ルビー・グループ㈱監査役(現任)	(注) 2、4	17,404
取締役 (監査等委員)	西野 充	1952年8月27日	1975年4月 ㈱東京銀行(現㈱三菱UFJ銀行)入行 2001年7月 ㈱東京三菱銀行理事 2003年4月 同行神戸支社長 2006年8月 ベンタックス㈱顧問 2007年1月 同社執行役員 2007年6月 同社執行役員CSR・内部統制統括部長 2008年3月 HOYA㈱監査部ゼネラル・マネージャー 2012年6月 旭精機工業㈱社外監査役 2016年12月 当社社外取締役(監査等委員)(現任) 2016年12月 LOCKON Vietnam Co.,Ltd.(現YRGLM VIETNAM Co.,Ltd.)監査役(現任) 2020年6月 旭精機工業㈱社外取締役 2022年2月 ファーエンドテクノロジー㈱監査役(現任)	(注) 2、4	12,404

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役 (監査等委員)	若松 典子	1970年12月13日	1995年10月 監査法人トーマツ（現有限責任監査法人トーマツ）入所 東京事務所国内監査部門所属	(注) 2、5	-
			2000年10月 新日本アーンストアンドヤング(株)（現EY税理士法人）入社		
			2005年 9 月 (株)バイオフロンティア・パートナーズ入社 管理部所属		
			2008年 6 月 監査法人トーマツ（現有限責任監査法人トーマツ）入所 金融グループ所属		
			2014年11月 公認会計士若松弘之事務所入所（現任）		
			2020年 3 月 (株)アイデミー社外監査役（現任）		
			2025年12月 当社社外取締役（監査等委員）（現任）		
計					2,698,499

(注)1. 取締役川原均及び藤田明久は社外取締役であります。

2. 取締役佐伯壽一、西野充及び若松典子は監査等委員である社外取締役であります。

3. 2025年12月19日開催の定時株主総会終結の時から1年間

4. 2024年12月20日開催の定時株主総会終結の時から2年間

5. 2025年12月19日開催の定時株主総会終結の時から2年間

6. 当社は、法令に定める監査等委員である取締役の員数を欠くことになる場合に備え、補欠の監査等委員である取締役1名を選任しております。補欠の監査等委員である取締役の略歴は次のとおりであります。なお、補欠の監査等委員である取締役は、社外取締役の要件を満たしております。

氏名	生年月日	略歴	所有株式数(株)
遠藤 元一	1957年 5月25日	1992年4月 弁護士登録(第二東京弁護士会) 1992年4月 田邨・大橋・横井法律事務所入所 1993年4月 清塚勝久法律事務所(現東京霞ヶ関法律事務所)入所 1996年8月 同所パートナー 2022年12月 オルトプラス社外取締役(監査等委員)(現任)	-

(注)補欠の監査等委員である取締役の任期は、就任した時から退任した補欠の監査等委員である取締役の任期の満了の時までであります。

7. 当社では、取締役会の一層の活性化を促し、取締役会の意思決定・業務執行の監督機能と各部署の業務執行機能を区分し、経営効率の向上を図るために執行役員制度を導入しております。定時株主総会後の取締役を兼ねない執行役員は中川仁(上席執行役員CTO)、栢木秀樹(CAO)、吉本啓顕、平田純也及び廣運馬であります。

社外役員の状況

当社は社内の視点に偏らない客観的な立場から経営者や専門家としての豊富な経験や幅広い見識に基づき、当社経営に対する助言と監督をいただくため、有価証券報告書提出日時点では取締役6名のうち3名(全て監査等委員である取締役)を社外から選任しております。

社外取締役佐伯壽一氏は、事業会社における長年にわたる豊富な経験と幅広い知識を有しており、当社の経営監督強化に貢献されることを期待して監査等委員である社外取締役に選任しております。また、2025年9月30日現在当社の株式を17,404株所有している他、同氏と当社の間には特別の利害関係はなく、当社からの独立性を損なうような事情はないため、当社経営陣からの独立性を有していると判断し、(株)東京証券取引所に独立役員として届け出ております。

社外取締役西野充氏は、金融機関及び事業会社における長年にわたる豊富な経験と幅広い知識を有しており、当社の経営監督強化に貢献されることを期待して監査等委員である社外取締役に選任しております。また、2025年9月30日現在当社の株式を12,404株所有している他、同氏と当社の間には特別の利害関係はなく、当社からの独立性を損なうような事情はないため、当社経営陣からの独立性を有していると判断し、(株)東京証券取引所に独立役員として届け出ております。

社外取締役大久保丈二氏は、公認会計士としての専門的な知見及び事業会社における長年の豊富な経験と幅広い知識を有しており、当社の経営監督強化に貢献されることを期待して監査等委員である社外取締役に選任しております。また、2025年9月30日現在当社の株式を11,404株所有している他、同氏と当社の間には特別の利害関係はなく、当社からの独立性を損なうような事情はないため、当社経営陣からの独立性を有していると判断し、(株)東京証券取引所に独立役員として届け出ております。

なお、2025年12月19日開催予定の定時株主総会の議案（決議事項）として、「監査等委員である取締役以外の取締役5名選任の件」「監査等委員である取締役1名選任の件」及び「補欠の監査等委員である取締役1名選任の件」を上程しており、当該決議が承認可決されますと、取締役8名のうち5名（社外取締役2名、監査等委員である取締役3名）が社外から選任される予定となっております。

社外取締役川原均氏は、事業会社における長年にわたる豊富な経験と幅広い知識を有しており、当社の経営監督強化に貢献されることを期待して社外取締役に選任しております。同氏と当社の間には特別の利害関係はなく、当社からの独立性を損なうような事情はないため、当社経営陣からの独立性を有していると判断し、㈱東京証券取引所に独立役員として届け出を予定しております。

社外取締役藤田明久氏は、事業会社における長年にわたる豊富な経験と幅広い知識を有しており、当社の経営監督強化に貢献されることを期待して社外取締役に選任しております。同氏と当社の間には特別の利害関係はなく、当社からの独立性を損なうような事情はないため、当社経営陣からの独立性を有していると判断し、㈱東京証券取引所に独立役員として届け出を予定しております。

社外取締役若松典子氏は、公認会計士としての専門的な知見及び事業会社における長年の豊富な経験と幅広い知識を有しており、当社の経営監督強化に貢献されることを期待して監査等委員である社外取締役に選任しております。同氏と当社の間には特別の利害関係はなく、当社からの独立性を損なうような事情はないため、当社経営陣からの独立性を有していると判断し、㈱東京証券取引所に独立役員として届け出を予定しております。

監査等委員である社外取締役による監督又は監査と内部監査、監査等委員会監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役はいずれも当社経営陣から独立した立場で、取締役の経営の監督あるいは監査を行っており、取締役会においてコンプライアンスやリスク管理等を含む内部統制システムの整備・運用状況及び内部監査結果の報告を受け、適宜意見を述べております。また、監査等委員である社外取締役は内部監査部門及び会計監査人と連携を取って監査を行うとともに、定期的に監査等委員である取締役以外の取締役と意見交換を行うこととしております。これらにより、当社は経営の健全性・適正性の確保に努めております。

なお、社外取締役を選任するための当社からの独立性に関する明文化された基準又は方針は現在策定しておりませんが、一般株主との利益相反に配慮し、当社経営陣から著しいコントロールを受けたり、反対に当社経営陣に著しいコントロールを及ぼしたりすることがない者を選任しております。

（３）【監査の状況】

監査等委員会監査の状況

監査等委員会は、監査等委員である取締役3名（うち社外取締役3名）で構成され、監査等委員である取締役は取締役会及び経営会議などの重要な会議に出席し、取締役会における意思決定の過程を監査するほか、重要書類の閲覧や取締役、社員及び会計監査人から報告等を通じ監査を行っております。

なお、監査等委員である取締役佐伯壽一氏は事業会社における長年にわたる豊富な経験と幅広い知識を有しており、監査等委員である取締役西野充氏は金融機関に及び事業会社における長年にわたる豊富な経験と幅広い知識を有しており、監査等委員である取締役大久保丈二氏は公認会計士として財務・会計に関する専門的な知見を有しているとともに、事業会社における長年の豊富な経験と幅広い知識を有しております。

2025年12月19日開催予定の定時株主総会にて、新たに監査等委員である取締役（社外取締役）として若松典子氏の選任を予定しております。若松氏は公認会計士として財務・会計に関する専門的な知見を有しているとともに、事業会社における長年の豊富な経験と幅広い知識を有しております。

当事業年度において当社は監査等委員会を22回開催しており、個々の監査等委員である取締役の出席状況については次のとおりであります。

氏 名	開催回数	出席回数
佐伯 壽一	22回	22回
西野 充	22回	22回
大久保 丈二	22回	22回

監査等委員会における具体的な検討事項は、監査方針及び監査計画等の策定、取締役の業務監査及び子会社監査の結果・情報共有、監査報告書の作成、会計監査人の再任に関する事項、会計監査人の報酬等に関する同意等について検討しました。監査等委員である取締役は監査等委員会で情報を共有するとともに、内部監査室や会計監査人と随時意見交換や情報共有を行い、連携を図っております。

内部監査の状況

当社の内部監査は、代表取締役から任命された内部監査担当者 1 名による内部監査室が行っております。内部監査室は内部監査規程及び代表取締役から承認を得た内部監査年度基本計画に基づき、当社及び子会社の業務運営に関し、諸法令、定款及び社内規程に則り、適正かつ効率的に行われているか監査を行っております。監査結果は、取締役会での報告ではなく代表取締役及び監査等委員会に直接報告され、業務の改善を必要とする事項があった場合は、被監査部門に対し改善勧告書をもって改善事項を勧告しております。被監査部門は速やかに改善し、後日改善勧告回答書にて、代表取締役役員に報告することとしております。

内部監査室、監査等委員会及び会計監査人は相互に連携し、監査上の問題点や課題等について、意見交換を行っております。また、内部監査室、監査等委員会及び会計監査人は、経営管理部等の内部統制部門と必要に応じて連携し、内部統制に関する報告、意見交換を行っております。

会計監査の状況

a. 監査法人の名称

PwC Japan有限責任監査法人

b. 継続監査期間

9 年間

c. 業務を執行した公認会計士の氏名

内園仁美、谷吉英樹

d. 監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士 4 名、その他16名です。

e. 監査法人の選定方針と理由

当社は監査法人の選定方針は定めておりませんが、監査法人の品質管理体制、独立性、専門性及び監査報酬等を総合的に勘案し監査法人を選定しております。

f. 監査等委員会による監査法人の評価

当社監査等委員会は、被監査部門である経営執行部門から報告を受けるほか、監督官庁による検査結果や監査法人内の品質管理体制などを監査法人より聴取すること等を通じて、監査品質を維持し、適切な監査が実施できているかを総合的に検討した上で、監査法人の評価を行っております。

監査報酬の内容等

a. 監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（千円）	非監査業務に基づく報酬（千円）	監査証明業務に基づく報酬（千円）	非監査業務に基づく報酬（千円）
提出会社	25,900	-	32,700	-
連結子会社	-	-	-	-
計	25,900	-	32,700	-

（注）当連結会計年度の監査証明業務に基づく報酬について、上記以外に前連結会計年度の監査に係る追加報酬4,400千円を支払っております。

b. 監査公認会計士等と同一のネットワーク（PwC）に対する報酬

該当事項はありません。

c. その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項はありません。

d. 監査報酬の決定方針

当社の監査報酬の決定方針は特に定めておりませんが、会計監査人の監査計画の内容、従前の事業年度における職務執行状況や報酬見積りの算出根拠等を検討し、監査等委員会の同意を得た後に決定しております。

e. 監査等委員会が会計監査人の報酬等に同意した理由

当社の監査等委員会は、会計監査人から監査計画について説明を受け、内容及び監査日数等を勘案し、監査報酬は妥当と判断したうえで同意を行っております。

(4) 【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

当社は、2021年2月5日開催の取締役会において、取締役の個人別の報酬等の内容に係る決定方針を決議しております。当該取締役会の決議に際しては、あらかじめ決議する内容について監査等委員会の意見を受けております。

また、取締役会は、当事業年度に係る取締役の個人別の報酬等について、報酬等の内容の決定方法及び決定された報酬等の内容が本方針と整合していることや、取締役（監査等委員である取締役を除く）の報酬等については、あらかじめ本方針に基づく報酬等の案について監査等委員会の検討及び特段の異論がない旨の意見決定を経ていることを確認しており、本方針に沿うものであると判断しております。

取締役（監査等委員を除く）の報酬限度額は、2015年12月22日開催の定時株主総会において年額200,000千円（うち社外取締役分は年額50,000千円）と決議いただいております。当該株主総会終結時点の取締役（監査等委員を除く）の員数は4名（うち社外取締役1名）であります。また別枠で、2017年12月22日開催の定時株主総会において、譲渡制限付株式の付与のための報酬限度額として年額50,000千円（うち社外取締役分は10,000千円）と決議いただいております。当該株主総会終結時点の取締役（監査等委員を除く）の員数は3名（うち社外取締役0名）であります。同様に、監査等委員である取締役の報酬限度額は、2015年12月22日開催の定時株主総会において年額30,000千円と決議いただいております。当該株主総会終結時点の監査等委員である取締役の員数は3名（うち社外取締役3名）であります。また別枠で、2017年12月22日開催の定時株主総会において、譲渡制限付株式の付与のための報酬限度額として年額10,000千円と決議いただいております。当該株主総会終結時点の監査等委員である取締役の員数は3名（うち社外取締役3名）であります。

取締役（監査等委員である取締役を除く）の個人別の報酬等の内容に係る決定方針の内容は次のとおりであります。

取締役（監査等委員である取締役を除く）の個人別の報酬等報酬については、外部調査機関による役員報酬サーベイにも照らしつつ、業績や貢献度等を総合的に勘案して支給される固定報酬と、非金銭報酬としての譲渡制限付株式報酬から構成されております。固定報酬については代表取締役が各取締役の報酬案を策定し、非金銭報酬については役割や職責に応じてあらかじめ内規で定められており、それぞれ代表取締役と監査等委員会とで事前協議を行った後に取締役会で決定しております。また、固定報酬は業績等を勘案して決定し、非金銭報酬については内規に基づいて決定することから、その割合については変動するものとし、固定報酬については毎月定額を支給し、非金銭報酬については取締役会決議に基づき一定の時期に支給しております。

なお、監査等委員である取締役の個人別の報酬額については、監査等委員会における協議により決定し、支給しております。

役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額(千円)		対象となる 役員の員数 (名)
		固定報酬	譲渡制限付 株式報酬	
取締役 (監査等委員を除く) (社外取締役を除く)	65,508	60,399	5,108	3
社外役員	20,528	18,000	2,528	3

(注) 譲渡制限付株式報酬は、非金銭報酬等として交付された譲渡制限付株式報酬に係る当事業年度の費用計上額であります。

役員ごとの連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載しておりません。

使用人兼務役員の使用人分給与のうち重要なもの

該当事項はありません。

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、保有目的が純投資目的である投資株式と純投資目的以外の目的である投資株式の区分について、専ら株式の価値の変動又は株式に係る配当によって利益を受けることを目的とする投資株式を純投資目的である投資株式とし、それ以外の投資株式については純投資目的以外の目的である投資株式と判断しております。

なお、当社は純投資目的である投資株式は保有しておりません。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社は、保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式について、当該株式が、取引先とのビジネスにおける関係強化を目的として企業価値向上に資することを条件に保有することとしており、個別銘柄毎に、保有目的が適切か、保有に伴う便益やリスクを検証し、保有の適否を判断することとしております。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

保有する株式はありません。

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

該当事項はありません。

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

該当事項はありません。

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

該当事項はありません。

保有目的が純投資目的である投資株式

該当事項はありません。

当事業年度に投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したもの

該当事項はありません。

当事業年度の前4事業年度及び当事業年度に投資株式の保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したもの

該当事項はありません。

第5【経理の状況】

1．連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号)に基づいて作成しております。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2024年10月1日から2025年9月30日まで)の連結財務諸表及び事業年度(2024年10月1日から2025年9月30日まで)の財務諸表について、PwC Japan有限責任監査法人により監査を受けております。

3．連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組について

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組を行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、又は会計基準等の変更等についての的確に対応することができる体制を整備するため、社内研修の実施及び社外研修の受講を行っております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2024年 9 月30日)	当連結会計年度 (2025年 9 月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	1,407,096	1,558,322
受取手形及び売掛金	1 465,899	1 604,817
契約資産	59,732	115,680
仕掛品	10,621	3,153
前払費用	126,343	104,253
未収入金	163,136	9,110
その他	10,937	8,889
貸倒引当金	3,593	2,461
流動資産合計	2,240,174	2,401,766
固定資産		
有形固定資産		
建物	105,530	102,881
減価償却累計額	69,027	70,681
建物（純額）	36,503	32,199
工具、器具及び備品	288,500	260,389
減価償却累計額	239,879	222,966
工具、器具及び備品（純額）	48,620	37,422
有形固定資産合計	85,123	69,622
無形固定資産		
のれん	430,254	57,869
ソフトウェア	424,993	342,960
ソフトウェア仮勘定	37,793	44,319
その他	13,617	11,788
無形固定資産合計	906,658	456,937
投資その他の資産		
投資有価証券	2 56,828	2 54,677
長期前払費用	77,121	55,476
繰延税金資産	39,182	44,994
差入保証金	118,762	120,973
その他	3,052	2,716
貸倒引当金	2,457	2,072
投資その他の資産合計	292,489	276,765
固定資産合計	1,284,272	803,324
資産合計	3,524,446	3,205,091

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2024年 9 月30日)	当連結会計年度 (2025年 9 月30日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	38,325	137,914
短期借入金	250,000	250,000
1年内返済予定の長期借入金	165,326	75,377
未払金	445,276	315,018
未払法人税等	40,301	88,548
預り金	60,004	59,706
契約負債	88,042	112,143
賞与引当金	27,009	55,330
受注損失引当金	408	-
株主優待引当金	8,119	9,760
その他	29	175
流動負債合計	1,122,842	1,103,974
固定負債		
長期借入金	429,005	354,036
資産除去債務	37,611	62,279
固定負債合計	466,616	416,315
負債合計	1,589,459	1,520,289
純資産の部		
株主資本		
資本金	318,065	318,065
資本剰余金	400,144	354,387
利益剰余金	1,304,566	1,105,859
自己株式	160,827	130,275
株主資本合計	1,861,949	1,648,038
その他の包括利益累計額		
為替換算調整勘定	15,064	10,952
その他の包括利益累計額合計	15,064	10,952
非支配株主持分	57,972	25,811
純資産合計	1,934,987	1,684,802
負債純資産合計	3,524,446	3,205,091

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2023年10月1日 至 2024年9月30日)	当連結会計年度 (自 2024年10月1日 至 2025年9月30日)
売上高	1 3,636,133	1 4,934,733
売上原価	1,516,988	2,368,365
売上総利益	2,119,144	2,566,367
販売費及び一般管理費	2 1,954,703	2 2,287,474
営業利益	164,441	278,892
営業外収益		
受取利息及び配当金	7,883	5,488
持分法による投資利益	4,069	3,340
還付消費税等	-	13,276
開発支援金	-	6,873
その他	1,003	4,234
営業外収益合計	12,957	33,212
営業外費用		
支払利息	3,354	7,461
上場関連費用	-	11,110
投資有価証券評価損	2,435	5,491
長期前払費用償却	4,168	504
固定資産除却損	3,968	7,150
その他	1,319	734
営業外費用合計	15,246	32,451
経常利益	162,151	279,654
特別利益		
子会社株式売却益	196	-
特別利益合計	196	-
特別損失		
減損損失	3 2,779	3 219,495
のれん償却額	-	4 98,808
固定資産除却損	-	5 21,944
特別損失合計	2,779	340,248
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期純損失()	159,569	60,594
法人税、住民税及び事業税	63,216	114,029
法人税等調整額	23,932	5,811
法人税等合計	87,149	108,217
当期純利益又は当期純損失()	72,419	168,812
非支配株主に帰属する当期純利益又は非支配株主に帰属する当期純損失()	3,652	26,613
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失()	68,767	142,198

【連結包括利益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2023年10月 1 日 至 2024年 9 月30日)	当連結会計年度 (自 2024年10月 1 日 至 2025年 9 月30日)
当期純利益又は当期純損失 ()	72,419	168,812
その他の包括利益		
為替換算調整勘定	6,049	4,176
その他の包括利益合計	6,049	4,176
包括利益	66,370	172,988
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	62,718	146,310
非支配株主に係る包括利益	3,652	26,677

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 2023年10月 1 日 至 2024年 9月30日）

（単位：千円）

	株主資本					その他の包括利益累計額		非支配株主 持分	純資産合計
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本 合計	為替換算 調整勘定	その他の 包括利益 累計額合計		
当期首残高	318,065	411,175	1,282,821	89,330	1,922,732	21,114	21,114	39,346	1,983,193
当期変動額									
剰余金の配当			46,849		46,849			1,353	48,202
親会社株主に帰属する当 期純利益			68,767		68,767				68,767
自己株式の取得				99,979	99,979				99,979
自己株式の処分		4,404		28,482	24,078				24,078
利益剰余金から資本剰余 金への振替		4,404	4,404		-				-
非支配株主との取引に係 る親会社の持分変動		11,031	4,229		6,801			273	7,074
連結範囲の変動					-			17,276	17,276
株主資本以外の項目の当 期変動額（純額）					-	6,049	6,049	2,976	3,073
当期変動額合計	-	11,031	21,744	71,496	60,784	6,049	6,049	18,626	48,207
当期末残高	318,065	400,144	1,304,566	160,827	1,861,949	15,064	15,064	57,972	1,934,987

当連結会計年度（自 2024年10月 1 日 至 2025年 9月30日）

（単位：千円）

	株主資本					その他の包括利益累計額		非支配株主 持分	純資産合計
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本 合計	為替換算 調整勘定	その他の 包括利益 累計額合計		
当期首残高	318,065	400,144	1,304,566	160,827	1,861,949	15,064	15,064	57,972	1,934,987
当期変動額									
剰余金の配当			48,065		48,065				48,065
親会社株主に帰属する当 期純損失（ ）			142,198		142,198				142,198
自己株式の取得					-				-
自己株式の処分		8,442		30,552	22,110				22,110
利益剰余金から資本剰余 金への振替		8,442	8,442		-				-
非支配株主との取引に係 る親会社の持分変動		45,756			45,756			5,483	51,240
連結範囲の変動					-				-
株主資本以外の項目の当 期変動額（純額）					-	4,112	4,112	26,677	30,790
当期変動額合計	-	45,756	198,706	30,552	213,911	4,112	4,112	32,161	250,185
当期末残高	318,065	354,387	1,105,859	130,275	1,648,038	10,952	10,952	25,811	1,684,802

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2023年10月 1 日 至 2024年 9 月30日)	当連結会計年度 (自 2024年10月 1 日 至 2025年 9 月30日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期純損失 ()	159,569	60,594
減価償却費	175,002	198,263
のれん償却額	122,224	106,067
賞与引当金の増減額 (は減少)	1,760	28,465
貸倒引当金の増減額 (は減少)	1,494	1,517
株主優待引当金の増減額 (は減少)	8,119	1,641
受取利息及び受取配当金	7,883	5,488
支払利息	3,354	7,461
減損損失	2,779	219,495
のれん償却額 (特別損失)	-	98,808
固定資産除却損	3,968	29,094
持分法による投資損益 (は益)	4,069	3,340
投資有価証券評価損益 (は益)	2,435	5,491
売上債権の増減額 (は増加)	117,311	139,060
契約資産の増減額 (は増加)	28,235	55,948
仕入債務の増減額 (は減少)	9,136	99,589
契約負債の増減額 (は減少)	17,977	24,117
前払費用の増減額 (は増加)	9,308	43,050
棚卸資産の増減額 (は増加)	2,935	7,649
未収入金の増減額 (は増加)	15,224	154,023
長期前払費用の増減額 (は増加)	43,999	22,401
未払金の増減額 (は減少)	70,865	128,419
預り金の増減額 (は減少)	13,116	149
その他	13,519	12,059
小計	461,631	663,163
利息及び配当金の受取額	5,477	5,218
利息の支払額	3,850	7,491
法人税等の支払額	76,998	70,444
営業活動によるキャッシュ・フロー	386,259	590,444
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の純増減額 (は増加)	9,588	17,601
有形固定資産の取得による支出	14,232	20,804
無形固定資産の取得による支出	141,304	147,359
差入保証金の差入による支出	400	2,323
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による支出	2 325,509	-
保険積立金の解約による収入	474	-
その他	1,166	48
投資活動によるキャッシュ・フロー	489,394	188,138
財務活動によるキャッシュ・フロー		
長期借入れによる収入	480,000	-
長期借入金の返済による支出	270,198	164,918
自己株式の取得による支出	99,979	-
配当金の支払額	46,751	48,045
非支配株主への配当金の支払額	1,353	-
連結の範囲の変更を伴わない子会社株式の取得による 支出	7,750	51,240
財務活動によるキャッシュ・フロー	53,967	264,204
現金及び現金同等物に係る換算差額	1,245	1,352
現金及び現金同等物の増減額 (は減少)	50,412	136,749
現金及び現金同等物の期首残高	1,375,332	1,324,920
現金及び現金同等物の期末残高	1 1,324,920	1 1,461,669

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1．連結の範囲に関する事項

連結子会社の数	7社
主要な連結子会社名	(株)イーシーキューブ ルビー・グループ(株) YRGLM VIETNAM Co., Ltd.

その他の連結子会社の名称は、「第1 企業の概況 4．関係会社の状況」に記載しているため、省略しております。

2．持分法の適用に関する事項

持分法を適用した関連会社の数	1社
会社等の名称	(有)彩

3．連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社のうちルビー・グループ(株)の子会社であるKIMEI GLOBAL Co., Ltd.の決算日は3月31日であります。連結財務諸表の作成にあたっては、9月30日現在の財務諸表を使用しております。その他の連結子会社の決算日は、連結決算日と一致しております。

4．会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

有価証券の評価基準及び評価方法

子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

其他有価証券

市場価格のない株式等

移動平均法による原価法

なお、金融商品取引法第2条第2項により有価証券とみなされるものについて、組合契約に規定されている決算報告日に応じて入手可能な決算書を基礎として持分相当額を純額で取り込む方法によっております。

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産（リース資産を除く）

定率法を採用しております。

（ただし、2016年4月1日以降に取得した建物附属設備は、定額法を採用しております。）

なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物及び構築物	8～15年
工具、器具及び備品	2～15年

無形固定資産（リース資産を除く）

定額法を採用しております。

なお、ソフトウェアについては、社内における見込み利用可能期間（5年以内）に基づく定額法によっております。

(3) 重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

賞与引当金

従業員の賞与の支払に備えるため、支給見込額のうち当連結会計年度負担額を計上しております。

株主優待引当金

株主優待制度に基づく将来の費用の発生に備えるため、発生見込額を計上しております。

受注損失引当金

受注契約に係る将来の損失に備えるため、当連結会計年度における受注契約に係る損失見込額を計上しております。

(4) 重要な収益及び費用の計上基準

当社グループの顧客との契約から生じる収益に関する主要な事業における主な履行義務の内容及び当該履行義務を充足する通常の時点（収益を認識する通常の時点）は以下のとおりであります。

サブスクリプションに係る収益認識

サブスクリプションサービスにおいては、主にインターネットを経由して提供するクラウド・SaaSについて、月額利用料金として顧客から料金を収受しております。時の経過に応じて履行義務が充足されると判断しており、役務を提供する期間にわたり収益を認識しております。

決済手数料に係る収益認識

決済に係る業務委託契約においては、業務提携契約に基づいて決済会社から紹介手数料を収受しており、決済サービス利用者がECサイトにおいて決済手段を利用した時点で履行義務が充足されるものと判断して収益を認識し、決済手数料受取額で収益の額を測定しております。

ソリューションサービスに係る収益認識

ソリューションサービスにおいては、主にECサイトやWEBサイト構築の受託開発及び関連する保守・メンテナンスサービスの提供を行っております。このうち受託開発については、顧客との契約に基づき、ごく短期的な受託開発を除き、履行義務の充足に係る進捗度を合理的に見積ることができる場合には、履行義務を充足するにつれて、一定の期間にわたり収益を認識しております。履行義務の充足に係る進捗度を合理的に見積ることができないが、当該履行義務を充足する際に発生する費用を回収することが見込まれる場合には、発生した実際原価の範囲でのみ収益を認識します。

履行義務の充足に係る進捗度は、見積総工数に対する発生工数の割合として算定します。また、ごく短期的な受託開発については、履行義務を充足し顧客が検収した時点で収益を認識しております。

保守・メンテナンスサービス等の一定期間の契約に基づき時の経過にわたり履行義務が充足されるサービスについては、契約期間に応じて均等按分により収益を認識しております。

ECサイト運用代行に係る収益認識

ECサイト運用代行においては、ECサイト上で販売される商品の注文から発送までの一連の業務を受託しております。これらの業務は、業務委託契約に基づきブランド各社より手数料を受領する形で提供しており、商品の発送をもって履行義務が充足されたと判断し、当該EC販売手数料の受取額をもって収益を認識しております。

(5) のれんの償却方法及び償却期間

のれんの償却については、その投資効果の発現する期間を個別に見積り、20年以内の合理的な期間で均等償却を行っております。

(6) 重要な外貨建て資産又は負債の本邦通貨への換算の基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。なお、在外子会社等の資産及び負債は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定に含めております。

(7) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期的な投資からなっております。

(8) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

関連する会計基準等の定めが明らかでない場合に採用した会計処理の原則及び手続

当社グループは、当社及び当社の子会社の取締役、執行役員及び従業員に対して、譲渡制限付株式を割り当てる株式報酬制度を導入しております。これに係る会計処理につきましては、報酬債権を付与日における株式の時価に基づいて計上し、当該報酬費用を対象勤務期間にわたって費用として処理しております。

(重要な会計上の見積り)

固定資産の減損

(1) 当連結会計年度の連結財務諸表に計上した金額

(単位：千円)

	前連結会計年度	当連結会計年度
有形固定資産	85,123	69,622
のれん	430,254	57,869
無形固定資産(のれん以外)	476,404	399,068
減損損失	2,779	219,495

当連結会計年度において、ルビー・グループ(株)に関するのれんを含む固定資産について減損損失を認識し、減損損失216,845千円を計上しております。

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

当社グループは、原則として他の資産又は資産グループのキャッシュ・フローから概ね独立したキャッシュ・フローを生み出す最小単位によって資産のグルーピングをしており、連結子会社にあつては主に、それぞれの会社を1つの独立したグルーピングの単位としております。また、処分予定資産及び遊休資産については、個別にグルーピングを行っております。これらの固定資産は定期的に減価償却されますが、減損の兆候があると認められる場合には、資産グループから得られる割引前将来キャッシュ・フロー総額と、のれんを含む固定資産の帳簿価額を比較することによって、減損損失の認識の可否を判定しております。

ルビー・グループ(株)に関するのれんを含む固定資産について、当連結会計年度末において経営環境の著しい悪化による減損の兆候が認められたため、減損損失の認識の判定を行った結果、割引前将来キャッシュ・フローの総額がのれんを含む固定資産の帳簿価額を下回ったことから減損損失を認識し、回収可能価額がゼロであったため、のれんを含む固定資産全額について減損損失を計上しております。当該判定に用いた将来キャッシュ・フローは、経営者が作成したルビー・グループ(株)の事業計画を基礎として見積もられており、売上高及び営業利益の予測などの不確実性を伴っております。

当社グループは、減損の兆候の識別、減損損失の認識及び測定にあたっては慎重に検討しており、上記の将来キャッシュ・フローの見積りは合理的と判断しておりますが、市場環境の変化により、その見積りの前提とした条件や仮定に変更が生じた場合、翌連結会計年度の連結財務諸表に重要な影響を与える可能性があります。

(未適用の会計基準等)

(リースに関する会計基準等)

- ・「リースに関する会計基準」(企業会計基準第34号 2024年9月13日 企業会計基準委員会)
 - ・「リースに関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第33号 2024年9月13日 企業会計基準委員会)
- 等

(1) 概要

企業会計基準委員会において、日本基準を国際的に整合性のあるものとする取組みの一環として、借手の全てのリースについて資産及び負債を認識するリースに関する会計基準の開発に向けて、国際的な会計基準を踏まえた検討が行われ、基本的な方針として、IFRS第16号の単一の会計処理モデルを基礎とするものの、IFRS第16号の全ての定めを採り入れるのではなく、主要な定めのみを採り入れることにより、簡素で利便性が高く、かつ、IFRS第16号の定めを個別財務諸表に用いても、基本的に修正が不要となることを目指したリース会計基準等が公表されました。

借手の会計処理として、借手のリースの費用配分の方法については、IFRS第16号と同様に、リースがファイナンス・リースであるかオペレーティング・リースであるかにかかわらず、全てのリースについて使用権資産に係る減価償却費及びリース負債に係る利息相当額を計上する単一の会計処理モデルが適用されます。

(2) 適用予定日

2028年9月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「リースに関する会計基準」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であり、ます。

（表示方法の変更）

（連結損益計算書）

前連結会計年度において、独立掲記していた営業外収益の「助成金収入」は、金額的重要性が乏しくなったため、当連結会計年度より「その他」に含めております。この表示方法を反映させるため、前連結会計年度の連結損益計算書の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において、営業外収益の「助成金収入」に表示していた570千円は「その他」として組み替えております。

（連結キャッシュ・フロー計算書）

前連結会計年度において、「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に含めていた「未収入金の増減額（は増加）」、「棚卸資産の増減額（は増加）」、「固定資産除却損」は、金額的重要性が増したため、当連結会計年度より独立掲記することとしました。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に表示していた 671千円は、「未収入金の増減額（は増加）」 15,224千円、「棚卸資産の増減額（は増加）」 2,935千円、「固定資産除却損」3,968千円、「その他」13,519千円として組み替えております。

（連結貸借対照表関係）

1 受取手形及び売掛金のうち、顧客との契約から生じた債権の金額は、それぞれ以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2024年9月30日)	当連結会計年度 (2025年9月30日)
売掛金	457,550千円	595,188千円
電子記録債権	8,348千円	9,629千円

2 非連結子会社及び関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2024年9月30日)	当連結会計年度 (2025年9月30日)
投資有価証券（株式）	25,434千円	28,775千円

（連結損益計算書関係）

1 顧客との契約から生じる収益

売上高については、顧客との契約から生じる収益及びそれ以外の収益を区分して記載しておりません。顧客との契約から生じる収益の金額は、連結財務諸表「注記事項（セグメント情報等）」に記載しております。

2 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2023年10月1日 至 2024年9月30日)	当連結会計年度 (自 2024年10月1日 至 2025年9月30日)
販売促進費	93,509千円	83,416千円
役員報酬	137,372	125,880
給与賞与	788,436	947,540
賞与引当金繰入額	15,543	29,009
貸倒引当金繰入額	2,814	648

3 減損損失

前連結会計年度（自 2023年10月1日 至 2024年9月30日）

場所	用途	種類
大阪市北区	アドエビス	ソフトウェア

当社グループは、減損損失の算定に当たり、他の資産又は資産グループから概ね独立したキャッシュ・フローを生み出す最小の単位によって資産のグルーピングを行っております。

当連結会計年度において、アドエビスの管理画面リニューアルに伴い、旧管理画面の機能の提供を終了することを決定したことにより、当該機能に係るソフトウェアについて減損処理を行い、減損損失2,779千円を計上しております。

当連結会計年度（自 2024年10月 1 日 至 2025年 9月30日）

場所	用途	種類
東京都千代田区	事務所	建物及び工具器具備品
東京都渋谷区	事務所等	建物及び工具器具備品等
-	その他	のれん

当連結会計年度において、㈱イーシーキューブの東京本社移転が決定したことにより、当該事務所に係る資産について減損処理を行い、減損損失2,649千円を計上しております。

また、2024年9月にルビー・グループ㈱の株式を取得し、連結子会社化していますが、ルビー・グループ㈱のECオペレーションマネジメント事業に関して、主要顧客の一部に解約可能性が生じたことで将来のキャッシュ・フローの獲得に不確実性が増したことに伴い、従来の事業計画を保守的な計画に見直した結果、ルビー・グループ㈱に係る有形固定資産及びのれんを含む無形固定資産残高216,845千円の全額を減損損失として計上しました。

4 のれん償却額

	前連結会計年度 (自 2023年10月 1 日 至 2024年 9月30日)	当連結会計年度 (自 2024年10月 1 日 至 2025年 9月30日)
のれん償却額（特別損失）	- 千円	98,808千円

当連結会計年度において、当社が保有する㈱トピカの株式の実質価額が取得原価に比べて著しく低下したことに伴い、個別決算において当該株式の減損処理を計上したため、連結決算において「連結財務諸表における資本連結手続に関する実務指針」（企業会計基準委員 移管指針第4号）第32項の規定に基づき、のれんの全額をのれん償却額として計上しております。

5 固定資産除却損

	前連結会計年度 (自 2023年10月 1 日 至 2024年 9月30日)	当連結会計年度 (自 2024年10月 1 日 至 2025年 9月30日)
固定資産除却損（特別損失）	- 千円	21,944千円

当連結会計年度において、連結子会社であるルビー・グループ㈱の商品管理システムについて、現時点において収益獲得のために稼働しておらず、また今後についても事業供用を行わないことを取締役会で決議したため、当該ソフトウェアの除却処理を行いました。

(連結包括利益計算書関係)

その他の包括利益に係る組替調整額並びに法人税等及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2023年10月 1 日 至 2024年 9月30日)	当連結会計年度 (自 2024年10月 1 日 至 2025年 9月30日)
為替換算調整勘定		
当期発生額	6,049千円	4,176千円
その他の包括利益合計	6,049千円	4,176千円

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2023年10月1日 至 2024年9月30日)

1.発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	6,372,415	-	-	6,372,415

2.自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	84,068	162,167	36,100	210,135

(注)1.普通株式の増加は、2023年11月6日に取締役会決議された自己株式の取得による増加154,600株及び譲渡制限付株式報酬対象者が退職したことによる無償取得による増加7,567株であります。

2.普通株式の減少は、2024年1月19日に取締役会決議された譲渡制限付株式報酬の割当による減少であります。

3.配当に関する事項

(1)配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (千円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2023年11月17日 取締役会	普通株式	46,533	7.40	2023年9月30日	2023年12月7日

(2)基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (千円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2024年11月15日 取締役会	普通株式	48,065	利益剰余金	7.80	2024年9月30日	2024年12月5日

当連結会計年度(自 2024年10月1日 至 2025年9月30日)

1.発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	6,372,415	-	-	6,372,415

2.自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	210,135	2,900	40,200	172,835

(注)1.普通株式の増加は、譲渡制限付株式報酬対象者が退職したことによる無償取得による増加であります。

2.普通株式の減少は、2025年1月17日に取締役会決議された譲渡制限付株式報酬の割当による減少であります。

3.配当に関する事項

(1)配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (千円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2024年11月15日 取締役会	普通株式	48,065	7.80	2024年9月30日	2024年12月5日

(2)基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (千円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2025年11月14日 取締役会	普通株式	48,976	利益剰余金	7.90	2025年9月30日	2025年12月4日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

- 1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2024年9月30日)	当連結会計年度 (2025年9月30日)
現金及び預金	1,407,096千円	1,558,322千円
預入期間が3ヶ月を超える定期預金	82,176	96,652
現金及び現金同等物	1,324,920	1,461,669

- 2 株式の取得により新たに連結子会社となった会社の資産及び負債の主な内訳

(前連結会計年度)

株式の取得により新たにルビー・グループ㈱及びその子会社であるKIMEI GLOBAL Co., Ltd.を連結したことに伴う連結開始時の資産及び負債の内訳並びに株式の取得価額と取得のための支出(純額)との関係は次のとおりであります。

流動資産	402,249千円
固定資産	193,747
のれん	149,779
流動負債	248,500
非支配株主持分	17,276
株式の取得価額	480,000
現金及び現金同等物	154,490
差引：取得のための支出	325,509

(リース取引関係)

(借主側)

オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2024年9月30日)	当連結会計年度 (2025年9月30日)
1年内	102,163	126,820
1年超	20,348	132,752
合計	122,511	259,573

(金融商品関係)

- 1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社は、資金運用については短期的な預金等に限定し、資金調達については銀行借入により行っております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

売掛金に係る顧客の信用リスクは、与信管理規程に沿ってリスク低減を図っております。また、取引先ごとの残高管理を行うとともに、主な取引先の信用状況を把握する体制としております。

営業債務である買掛金及び未払金は、全て1年以内の支払期日となっております。また、借入金の使途は運転資金であり、返済日は決算日後最長で6年であります。

(3) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

前連結会計年度（2024年9月30日）

	連結貸借対照表計上額(千円)	時価(千円)	差額(千円)
(1) 差入保証金	118,762	118,659	103
資産計	118,762	118,659	103
(2) 長期借入金(1)	594,331	577,652	16,678
負債計	594,331	577,652	16,678

当連結会計年度（2025年9月30日）

	連結貸借対照表計上額(千円)	時価(千円)	差額(千円)
(1) 差入保証金	120,973	119,224	1,748
資産計	120,973	119,224	1,748
(2) 長期借入金(1)	429,413	402,036	27,376
負債計	429,413	402,036	27,376

1. 長期借入金には、1年内返済予定の長期借入金を含めております。
2. 現金及び預金、受取手形及び売掛金、買掛金、短期借入金、未払金は短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似することから、注記を省略しております。
3. 投資有価証券及び連結貸借対照表に持分相当額を純額で計上する組合等への出資は上表には含めておりません。当該金融商品の連結貸借対照表計上額は以下のとおりであります。

区分	2024年9月30日(千円)	2025年9月30日(千円)
その他有価証券		
非上場株式	25,434	28,775
投資事業組合出資	31,393	25,902

(注) 1. 金銭債権の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度（2024年9月30日）

	1年以内(千円)
現金及び預金	1,407,096
受取手形及び売掛金	465,899
合計	1,872,996

当連結会計年度（2025年9月30日）

	1年以内(千円)
現金及び預金	1,558,322
受取手形及び売掛金	604,817
合計	2,163,140

２．長期借入金及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度（2024年 9月30日）

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
短期借入金	250,000	-	-	-	-	-
長期借入金	165,326	75,785	72,948	72,576	72,576	135,120
合計	415,326	75,785	72,948	72,576	72,576	135,120

当連結会計年度（2025年 9月30日）

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
短期借入金	250,000	-	-	-	-	-
長期借入金	75,377	72,540	72,168	72,168	68,568	68,592
合計	325,377	72,540	72,168	72,168	68,568	68,592

３．金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に係るインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の３つのレベルに分類しております。

レベル１の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産又は負債に関する相場価格により算定した時価

レベル２の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、レベル１のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価

レベル３の時価：観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(１) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品

前連結会計年度（2024年 9月30日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（2025年 9月30日）

該当事項はありません。

(２) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品

前連結会計年度（2024年 9月30日）

区分	時価（千円）			
	レベル１	レベル２	レベル３	合計
差入保証金	-	118,659	-	118,659
資産計	-	118,659	-	118,659
長期借入金	-	577,652	-	577,652
負債計	-	577,652	-	577,652

当連結会計年度（2025年9月30日）

区分	時価（千円）			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
差入保証金	-	119,224	-	119,224
資産計	-	119,224	-	119,224
長期借入金	-	402,036	-	402,036
負債計	-	402,036	-	402,036

（注） 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

差入保証金

時価は、合理的に見積もった将来キャッシュ・フローを、国債の利回りで割り引いた現在価値により算定しており、レベル2の時価に分類しております。

長期借入金

時価は、元利金の合計額を、同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しており、レベル2の時価に分類しております。

（退職給付関係）

1．採用している退職給付制度の概要

当社は確定拠出年金制度を採用しており、一部の連結子会社は確定拠出年金制度及び中小企業退職金共済を採用しております。

2．退職給付費用に関する事項

	前連結会計年度 （自 2023年10月1日 至 2024年9月30日）	当連結会計年度 （自 2024年10月1日 至 2025年9月30日）
確定拠出年金への掛金拠出額	10,690千円	10,883千円
中小企業退職金共済への掛金拠出額	2,912	3,445
退職給付費用	13,602	14,328

（ストック・オプション等関係）

1．譲渡制限付株式報酬に係る費用計上額及び科目名

（単位：千円）

	前連結会計年度 （自 2023年10月1日 至 2024年9月30日）	当連結会計年度 （自 2024年10月1日 至 2025年9月30日）
売上原価	2,816	3,439
販売費及び一般管理費	16,827	15,069

２．譲渡制限付株式報酬の内容、規模及びその変動状況

(１) 譲渡制限付株式報酬の内容

	2022年２月発行	2023年２月発行	2024年２月発行	2025年２月発行
付与対象者の区分及び人数	取締役（監査等委員である取締役３名を含む。）６名 取締役を兼務しない執行役員３名 従業員１５名 子会社の取締役１名 子会社の従業員４名	取締役（監査等委員である取締役３名を含む。）６名 取締役を兼務しない執行役員３名 従業員１４名 子会社の取締役２名 子会社の従業員１名	取締役（監査等委員である取締役３名を含む。）６名 取締役を兼務しない執行役員４名 従業員１６名 子会社の従業員３名	取締役（監査等委員である取締役３名を含む。）６名 取締役を兼務しない執行役員５名 従業員１６名 子会社の執行役員１名 子会社従業員２名
譲渡制限株式の数	普通株式 22,600株	普通株式 23,600株	普通株式 36,100株	普通株式 40,200株
付与日	2022年２月14日	2023年２月20日	2024年２月19日	2025年２月17日
譲渡制限期間	自 2022年２月14日 至 2025年２月13日	自 2023年２月20日 至 2026年２月19日	自 2024年２月19日 至 2027年２月18日	自 2025年２月17日 至 2028年２月16日
解除条件	(注)１．２．	(注)１．２．	(注)１．２．	(注)１．２．

(注)１．譲渡制限の解除条件

対象者が譲渡制限期間中、継続して、当社又は当社の子会社の取締役、取締役を兼務しない執行役員、監査等委員である取締役、使用人、顧問又は相談役その他これに準ずる地位のいずれかの地位にあることを条件として、譲渡制限期間が満了した時点で、本割当株式に係る譲渡制限を解除する。

２．組織再編等における取扱い

譲渡制限期間中に、当社が消滅会社となる合併契約、当社が完全子会社となる株式交換契約又は株式移転計画その他の組織再編等に関する事項が当社の株主総会（ただし、当該組織再編等に関して当社の株主総会による承認を要しない場合においては、当社の取締役会）で承認された場合には、取締役会の決議により、当該時点において保有する本割当株式の数に、譲渡制限期間の開始月から当該承認の日を含む月までの月数を当該対象株式に対応した譲渡制限期間に係る月数で除した数を乗じた数（ただし、計算の結果、１株未満の端数が生ずる場合はこれを切り捨てる）の株式について、組織再編等効力発生日の前営業日の直前時をもって、これに係る本譲渡制限を解除する。また、組織再編等の効力発生日の前営業日をもって、同日における対象者の保有に係る本譲渡制限が解除されていない株式の全部を、当社は当然に無償で取得する。

(２) 譲渡制限付株式報酬の規模及びその変動状況

株式数

	2022年２月発行	2023年２月発行	2024年２月発行	2025年２月発行
前連結会計年度末（株）	18,600	20,600	33,800	-
付与（株）	-	-	-	40,200
無償取得（株）	-	-	2,300	600
譲渡制限解除（株）	18,600	-	-	-
未解除残（株）	-	20,600	31,500	39,600

単価情報

	2022年２月発行	2023年２月発行	2024年２月発行	2025年２月発行
付与日における公正な評価単価（円）	1,074	620	667	550

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2024年9月30日)	当連結会計年度 (2025年9月30日)
繰延税金資産		
賞与引当金	6,664千円	14,158千円
未払事業税	2,543	8,737
有形固定資産	5,087	58,379
資産除去債務	11,694	20,043
投資有価証券	5,104	3,491
譲渡制限付株式報酬	8,919	8,529
資産調整勘定	4,816	-
税務上の繰越欠損金(注)2	25,001	68,125
貸倒引当金	1,874	1,458
その他	3,033	2,171
繰延税金資産小計	74,735	185,096
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額(注)2	25,001	68,125
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	6,504	65,039
評価性引当額小計(注)1	31,506	133,165
繰延税金資産合計	43,232	51,930
繰延税金負債		
資産除去債務に対応する除去費用	4,049	6,935
繰延税金負債合計	4,049	6,935
繰延税金資産純額	39,182	44,994

(注)1. 繰延税金資産から控除された額(評価性引当額)に重要な変動が生じております。当該変動の主な内容は、税務上の繰越欠損金の増加及び有形固定資産の増加によるものであります。

(注)2. 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額

(注)3. 法人税等の税率の変更による繰延税金資産及び繰延税金負債の金額の修正

「所得税法等の一部を改正する法律(令和7年法律第13号)」が2025年3月31日に国会で成立したことに伴い、2026年4月1日以後開始する連結会計年度より、「防衛特別法人税」の課税が行われることになりました。

これに伴い、2026年4月1日以後開始する連結会計年度以降に解消が見込まれる一時差異等に係る繰延税金資産及び繰延税金負債については、法定実効税率が30.6%から31.5%に変更し計算しております。

なお、この税率変更による影響額は軽微であります。

前連結会計年度(2024年9月30日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)	合計 (千円)
税務上の繰越欠損金()	-	-	-	1,573	-	23,428	25,001
評価性引当額	-	-	-	1,573	-	23,428	25,001
繰延税金資産	-	-	-	-	-	-	-

() 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

当連結会計年度（2025年9月30日）

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)	合計 (千円)
税務上の繰越欠損金()	-	-	-	-	-	68,125	68,125
評価性引当額	-	-	-	-	-	68,125	68,125
繰延税金資産	-	-	-	-	-	-	-

() 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2024年9月30日)	当連結会計年度 (2025年9月30日)
法定実効税率 (調整)	30.6%	当連結会計年度において、税金等調整前当期純損失を計
交際費等永久に損金に算入されない項目	5.1	上しているため、記載を省略
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	5.7	しております。
住民税均等割	1.3	
のれんの償却額	24.2	
税務上の繰越欠損金の増減	1.8	
評価性引当額の増減	0.3	
税率変更による期末繰延税金資産の増加額	-	
その他	0.7	
税効果会計適用後の法人税等の負担率	54.6	

(企業結合等関係)

(企業結合に係る暫定的な会計処理の確定)

2024年9月30日に行われたルビー・グループ(株)との企業結合について、前連結会計年度において暫定的な会計処理を行っていましたが、当連結会計年度に確定しております。この暫定的な会計処理の確定に伴い、当連結会計年度の連結財務諸表に含まれる比較情報において取得原価の当初配分額に重要な見直しが反映されております。

この結果、暫定的に算定されたのれんの金額149,779千円は、会計処理の確定により40,874千円増加し、190,654千円となっております。また、前連結会計年度末の連結貸借対照表は、のれんが40,874千円増加し430,254千円、繰延税金資産が40,874千円減少し39,182千円となっております。

(資産除去債務関係)

資産除去債務のうち連結貸借対照表に計上しているもの

(1) 当該資産除去債務の概要

本社等オフィスの不動産賃貸借契約に伴う原状回復義務であります。

(2) 当該資産除去債務の金額の算定方法

残存使用見込期間は短期間であり、割引計算による金額の重要性が乏しいことから、割引前の見積り額を使用して資産除去債務の金額を計算しております。

(3) 当該資産除去債務の総額の増減

	前連結会計年度 (自 2023年10月1日 至 2024年9月30日)	当連結会計年度 (自 2024年10月1日 至 2025年9月30日)
期首残高	21,662千円	37,611千円
有形固定資産の取得に伴う増加額	4,720	4,348
見積りの変更による増加額	-	20,319
連結範囲の変動に伴う増加額	11,229	-
期末残高	37,611	62,279

(4) 当該資産除去債務の金額の見積りの変更

当連結会計年度において、当社及び連結子会社の不動産賃貸借契約に伴う原状回復義務として計上していた資産除去債務について、原状回復工事に係る費用の新たな情報の入手に伴い、原状回復費用に関して見積りの変更を行いました。

この見積り変更による増加額20,319千円を変更前の資産除去債務残高に加算しております。

なお、当該見積りの変更により、当連結会計年度の営業利益及び経常利益は4,255千円減少し、税金等調整前当期純損失は同額増加しております。

(収益認識関係)

1. 顧客との契約から生じる収益を分解した情報

顧客との契約から生じる収益を分解した情報は、「注記情報（セグメント情報等）」に記載のとおりであります。

2. 顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項 4. 会計方針に関する事項 (4) 重要な収益及び費用の計上基準」に記載のとおりであります。

3. 当連結会計年度及び翌連結会計年度以降の収益の金額を理解するための情報

(1) 契約負債の残高等

前連結会計年度（自 2023年10月1日 至 2024年9月30日）

	当連結会計年度（期首）	当連結会計年度（期末）
契約資産（千円）	31,496	59,732
契約負債（千円）	61,730	88,042

（注）1. 当連結会計年度に認識された収益の額のうち期首現在の契約負債残高に含まれていた額は61,730千円であります。

2. 契約資産の増減は、収益認識（契約資産の増加）と売上債権への振替（契約資産の減少）により生じたものであります。契約負債の増減は、前受金の受け取り（契約負債の増加）と収益認識（契約負債の減少）により生じたものであります。

当連結会計年度（自 2024年10月1日 至 2025年9月30日）

	当連結会計年度（期首）	当連結会計年度（期末）
契約資産（千円）	59,732	115,680
契約負債（千円）	88,042	112,143

（注）1. 当連結会計年度に認識された収益の額のうち期首現在の契約負債残高に含まれていた額は88,042千円であります。

2. 契約資産の増減は、収益認識（契約資産の増加）と売上債権への振替（契約資産の減少）により生じたものであります。契約負債の増減は、前受金の受け取り（契約負債の増加）と収益認識（契約負債の減少）により生じたものであります。

(2) 残存履行義務に配分した取引価格

当社グループにおいては、予想契約期間が1年を超える重要な取引はありません。また、顧客との契約から生じる対価の中に、取引価格に含まれていない重要な金額はありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

(1) 報告セグメントの決定方法

当社の報告セグメントは、当社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社は、部署を基礎としてサービス別のセグメントから構成されており、「マーケティングDX支援事業」及び「コマース支援事業」の2つを報告セグメントとしております。

(2) 各報告セグメントに属する製品及びサービスの種類

「マーケティングDX支援事業」は、広告効果測定サービス「アドエビス」、マーケティング・キャンペーン・マネジメント・プラットフォーム「アドエビスキャンペーンマネージャー」、運用型広告レポート自動作成ツール「アドレポ」、動画マーケティングのコンテンツ制作や運用を行う「TOPICA WORKS」、プロジェクト管理ツール「My Redmine」等を提供する事業です。また、「コマース支援事業」はECサイト構築のためのオープンプラットフォーム「EC-CUBE」及びEC構築・運用支援サービス等を提供する事業です。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一であります。

全社共通の費用は一定の比率で各セグメントに配賦しております。報告セグメントの利益は営業利益ベースの数値であります。セグメント間の内部売上高又は振替高は市場実勢価格を勘案して決定しております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報及び収益の分解情報
前連結会計年度（自 2023年10月 1 日 至 2024年 9月30日）

（単位：千円）

	報告セグメント			調整額	連結財務諸表 計上額
	マーケティング DX支援事業	コマー 支援事業	計		
売上高					
顧客との契約から生じる収益	2,857,651	778,481	3,636,133	-	3,636,133
その他の収益	-	-	-	-	-
外部顧客への売上高	2,857,651	778,481	3,636,133	-	3,636,133
セグメント間の内部売上高又は振替高	4,129	-	4,129	4,129	-
計	2,861,781	778,481	3,640,262	4,129	3,636,133
セグメント利益	150,969	7,482	158,451	5,989	164,441
セグメント資産	2,433,350	1,093,857	3,527,207	2,761	3,524,446
その他の項目					
減価償却費	157,617	17,384	175,002	-	175,002
のれん償却額	109,191	13,033	122,224	-	122,224
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	112,919	442,769	555,689	-	555,689

- （注）1. セグメント利益の調整額5,989千円は、セグメント間取引消去によるものであります。
2. セグメント利益の合計額は、連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。
3. セグメント資産の調整額 2,761千円は、セグメント間取引消去によるものであります。

当連結会計年度（自 2024年10月 1 日 至 2025年 9月30日）

（単位：千円）

	報告セグメント			調整額	連結財務諸表 計上額
	マーケティング DX支援事業	コマー 支援事業	計		
売上高					
顧客との契約から生じる収益	2,918,792	2,015,940	4,934,733	-	4,934,733
その他の収益	-	-	-	-	-
外部顧客への売上高	2,918,792	2,015,940	4,934,733	-	4,934,733
セグメント間の内部売上高又は振替高	4,754	1,750	6,505	6,505	-
計	2,923,546	2,017,691	4,941,238	6,505	4,934,733
セグメント利益	272,683	6,209	278,892	-	278,892
セグメント資産	2,367,759	839,560	3,207,320	2,228	3,205,091
その他の項目					
減価償却費	141,269	56,994	198,263	-	198,263
のれん償却額	69,888	36,179	106,067	-	106,067
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	143,207	49,645	192,852	-	192,852

- （注）1. セグメント利益の合計額は、連結損益計算書の営業利益と一致しております。
2. セグメント資産の調整額 2,228千円は、セグメント間取引消去によるものであります。
3. 報告セグメントの「マーケティングDX支援事業」の一部ののれんについて、「連結財務諸表における資本連結手続に関する実務指針」（企業会計基準委員会 移管指針第4号）第32項の規定に基づき、のれん償却額 98,808千円を特別損失に計上しておりますが、当該金額は上記に含まれておりません。

【関連情報】

前連結会計年度（自 2023年10月 1 日 至 2024年 9月30日）

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在する有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2024年10月1日 至 2025年9月30日）

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在する有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、該当事項はありません。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 2023年10月1日 至 2024年9月30日）

マーケティングDX支援事業において、アドエビスの管理画面リニューアルに伴い、旧管理画面の機能の提供を終了することを決定したことにより、当該機能に係るソフトウェアについて減損処理を行い、減損損失2,779千円を計上しました。

当連結会計年度（自 2024年10月1日 至 2025年9月30日）

コマース支援事業において、2024年9月にルビー・グループ(株)の株式を取得し、連結子会社化していますが、ルビー・グループ(株)のECオペレーションマネジメント事業に関して、主要顧客の一部に解約可能性が生じたことで将来のキャッシュ・フローの獲得に不確実性が増したことに伴い、従来の事業計画を保守的な計画に見直した結果、ルビー・グループ(株)に係るのれんを含む固定資産について216,845千円を減損損失として計上しました。

コマース支援事業において、(株)イーシーキューブの東京本社移転が決定したことにより、当該事務所に係る資産について減損処理を行い、減損損失2,649千円を計上しております。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 2023年10月 1 日 至 2024年 9 月30日）

（単位：千円）

	マーケティングDX支援 事業	コマース支援事業	全社・消去	合計
当期償却額	109,191	13,033	-	122,224
当期末残高	204,842	225,411	-	430,254

当連結会計年度（自 2024年10月 1 日 至 2025年 9 月30日）

（単位：千円）

	マーケティングDX支援 事業	コマース支援事業	全社・消去	合計
当期償却額	69,888	36,179	-	106,067
当期末残高	36,146	21,722	-	57,869

（注）「マーケティングDX支援事業」の一部ののれんについて、「連結財務諸表における資本連結手続に関する実務指針」（企業会計基準委員会 移管指針第4号）第32項の規定に基づき、のれん償却額98,808千円を特別損失に計上しておりますが、当該金額は上記に含まれておりません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度（自 2023年10月 1 日 至 2024年 9 月30日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2024年10月 1 日 至 2025年 9 月30日）

該当事項はありません。

(1 株当たり情報)

前連結会計年度 (自 2023年10月 1 日 至 2024年 9 月30日)		当連結会計年度 (自 2024年10月 1 日 至 2025年 9 月30日)	
1 株当たり純資産額	304.60円	1 株当たり純資産額	267.60円
1 株当たり当期純利益	11.14円	1 株当たり当期純損失 ()	22.98円

- (注) 1 . 前連結会計年度の潜在株式調整後 1 株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
- 2 . 当連結会計年度の潜在株式調整後 1 株当たり当期純利益については、1 株当たり当期純損失であり、また、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
- 3 . 1 株当たり当期純利益又は 1 株当たり当期純損失 () の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2023年10月 1 日 至 2024年 9 月30日)	当連結会計年度 (自 2024年10月 1 日 至 2025年 9 月30日)
1 株当たり当期純利益又は 1 株当たり当期純損失 ()		
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失 () (千円)	68,767	142,198
普通株主に帰属しない金額 (千円)	-	-
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失 () (千円)	68,767	142,198
普通株式の期中平均株式数 (株)	6,170,475	6,187,272

(重要な後発事象)

(シルバーエッグ・テクノロジー(株)への公開買付け等の実施)

当社は、2025年11月14日開催の取締役会において、シルバーエッグ・テクノロジー(株) (以下「対象者」という。) を当社の完全子会社とするため、対象者の株券等を公開買付けにより取得することを決議いたしました。

(1) 公開買付けの目的

当社は、中期経営方針「VISION 2027」の実現に向けた具体的な施策の 1 つとして、M&Aの実施等によるコマース支援事業における支援領域拡大の機会を模索しておりました。

当社はマーケティングDX支援事業及びコマース支援事業を行っており、対象者はAIを活用したレコメンド技術及びそれをベースとしたAIマーケティングサービス事業を行っており、ともにEC領域やマーケティング領域を主たる事業領域としております。当社は、両者がデジタルマーケティング領域におけるECサイト運営者が抱える課題の解決に向き合いながら、異なる領域でサービスを展開していることから、両者の事業ノウハウやアセットを相互共有・活用し、顧客の課題解決を統合的に支援することにより、更なる提供価値の向上が実現できる可能性があるとの考えに至りました。

また、当社は、対象者の上場が維持された場合、対象者は公開買付者から一定程度独立した事業運営を行わざるを得ず、相互の経営資源・ノウハウの共有・活用や迅速な意思決定に一定の制約が生じることが懸念され、両者のシナジーを最大化するためには対象者を当社の完全子会社とすることが望ましいと考え、公開買付けを実施することになりました。

(2) 対象者の概要

名称	シルバーエッグ・テクノロジー(株)
所在地	大阪府吹田市江坂町一丁目23番43号
名称代表者の役職・氏名	代表取締役社長 トーマス・アクイナス・フォーリー
事業内容	AIを活用したレコメンド技術及びそれをベースとしたAIマーケティングサービス事業
資本金	287百万円 (2025年 6 月30日現在)
設立年月日	1998年8月26日

(3) 本公開買付けの概要

買付け等の期間	2025年11月17日から2026年1月6日まで (31営業日)
買付け等の価格(以下「本公開買付価格」という。)	普通株式1株につき、金770円 第3回新株予約権1個につき、金1円
買付予定の株券等の数	買付予定数 2,173,957株 買付予定数の下限 1,181,700株 買付予定数の上限 - 株

(注) 応募株券等の数の合計が買付予定数の下限(1,181,700株)に満たない場合は、応募株券等の全部の買付け等を行いません。応募株券等の数の合計が買付予定数の下限(1,181,700株)以上の場合、応募株券等の全部の買付け等を行います。

(4) 買付代金 1,674百万円

(注) 「買付代金」は、本公開買付けにおける買付予定数(2,173,957株)に、本公開買付価格(770円)を乗じた金額です。

(5) 決済の開始日 2026年1月14日

(6) 本公開買付け後の組織再編等の方針(いわゆる二段階買収に関する事項)

当社は、対象者の代表取締役であり対象者の筆頭株主(2025年6月30日現在)であるトーマス・アクイナス・フォーリー氏(以下「不応募予定株主」という。)との間で、本公開買付けへの不応募契約書を2025年11月14日付で締結しております。本公開買付けの成立後に、対象者の株主を当社及び不応募予定株主のみとし、対象者を非公開化するための一連の手続(以下「スクイズアウト手続」という。)を実施し、スクイズアウト手続の完了後、不応募予定株主から株式を353百万円()で譲受け、対象者を完全子会社とする方針であります。

不応募予定株主が所有する対象者株式 802,900株

(多額な資金の借入について)

当社は、2025年11月14日開催の取締役会において、公開買付けの方法によるシルバーエッグ・テクノロジー(株)の株式取得資金に充当することを目的として、以下のとおりコミットメント期間付タームローン契約について決議し、2025年11月26日付で契約を締結いたしました。

借入先の名称	(株)みずほ銀行
借入限度枠	1,680百万円
借入金利	基準金利 + スプレッド
契約予定日	2025年11月26日
コミットメント期間	2025年11月28日 ~ 2026年11月30日
タームローン期間	2026年11月30日 ~ 2033年11月30日
担保又は保証の内容	該当事項なし
財務上の特約の内容	各連結会計年度の決算期の末日における連結貸借対照表における純資産の部の金額を正の値とすること。 各連結会計年度の決算期における連結損益計算書に示される経常損益が、2期連続して損失とならないようにすること。 各連結会計年度の決算期における連結貸借対照表を用いて計算されるネットレバレッジレシオを5以下の値に維持すること。

(注) 本契約は、1,680百万円のコミットメント期間が付されたタームローン契約であり、当該コミットメント期間内において当社が借入を求めた場合に個別の貸付実行が行われることとなります。また、2026年11月30日における借入残高に係る返済期間として、タームローン期間を設けております。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	250,000	250,000	0.8	-
1年以内に返済予定の長期借入金	165,326	75,377	1.1	-
1年以内に返済予定のリース債務	-	-	-	-
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	429,005	354,036	1.1	2026年～2031年
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	-	-	-	-
その他有利子負債	-	-	-	-
合計	844,331	679,413	-	-

(注) 1. 平均利率については、借入金等の期末残高に対する加重平均利率を記載しております。

2. 長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年間の返済予定額は以下のとおりであります。

区分	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
長期借入金	72,540	72,168	72,168	68,568

【資産除去債務明細表】

明細表に記載すべき事項が連結財務諸表規則第15条の23に規定する注記事項として記載されているため、記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	中間連結会計期間	第3四半期	当連結会計年度
売上高 (千円)	1,167,778	2,382,354	3,636,314	4,934,733
税金等調整前中間(当期) (四半期)純利益(は損失) (千円)	17,837	65,028	162,442	60,594
親会社株主に帰属する中間 (当期)(四半期)純利益 (は損失) (千円)	4,047	26,817	107,126	142,198
1株当たり中間(当期) (四半期)純利益(は損失) (円)	0.66	4.34	17.33	22.98

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益 (は損失) (円)	0.66	3.68	12.95	40.21

(注) 当社は、第1四半期及び第3四半期について金融商品取引所の定める規則により四半期に係る財務情報を作成しておりますが、当該四半期に係る財務情報に対する期中レビューは受けておりません。

2【財務諸表等】

(1)【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2024年9月30日)	当事業年度 (2025年9月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	845,093	914,326
受取手形及び売掛金	299,879	303,337
前払費用	83,224	78,182
未収入金	3,319	5,085
その他	7,116	7,162
貸倒引当金	1,940	1,450
流動資産合計	1,236,693	1,306,644
固定資産		
有形固定資産		
建物	66,449	83,749
減価償却累計額	49,241	52,787
建物（純額）	17,207	30,961
工具、器具及び備品	231,926	241,488
減価償却累計額	198,678	209,746
工具、器具及び備品（純額）	33,247	31,741
有形固定資産合計	50,455	62,703
無形固定資産		
商標権	9,979	8,168
ソフトウェア	299,347	265,805
ソフトウェア仮勘定	21,350	42,623
のれん	44,312	15,605
その他	3,546	3,546
無形固定資産合計	378,535	335,749
投資その他の資産		
投資有価証券	31,393	25,902
関係会社株式	873,072	452,851
長期前払費用	65,514	47,389
繰延税金資産	35,715	32,897
差入保証金	71,572	73,235
その他	5,416	2,288
貸倒引当金	2,069	1,644
投資その他の資産合計	1,080,614	632,920
固定資産合計	1,509,605	1,031,373
資産合計	2,746,298	2,338,018

(単位：千円)

	前事業年度 (2024年 9 月30日)	当事業年度 (2025年 9 月30日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	19,777	16,906
短期借入金	250,000	250,000
1年内返済予定の長期借入金	158,138	68,568
未払金	150,014	161,626
未払法人税等	35,620	67,258
預り金	26,760	25,923
契約負債	10,483	12,615
賞与引当金	16,780	32,550
株主優待引当金	8,119	9,760
その他	-	165
流動負債合計	675,693	645,373
固定負債		
長期借入金	411,024	342,864
資産除去債務	21,662	38,962
固定負債合計	432,686	381,826
負債合計	1,108,379	1,027,199
純資産の部		
株主資本		
資本金	318,065	318,065
資本剰余金		
資本準備金	308,043	308,043
資本剰余金合計	308,043	308,043
利益剰余金		
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	1,172,636	814,984
利益剰余金合計	1,172,636	814,984
自己株式	160,827	130,275
株主資本合計	1,637,918	1,310,818
純資産合計	1,637,918	1,310,818
負債純資産合計	2,746,298	2,338,018

【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2023年10月1日 至 2024年9月30日)	当事業年度 (自 2024年10月1日 至 2025年9月30日)
売上高	2,410,737	2,419,551
売上原価	848,897	771,769
売上総利益	1,561,840	1,647,781
販売費及び一般管理費	¹ 1,413,872	¹ 1,420,347
営業利益	147,968	227,434
営業外収益		
受取利息及び配当金	² 31,780	² 18,598
業務受託料	² 25,092	² 35,408
その他	339	1,199
営業外収益合計	57,212	55,205
営業外費用		
支払利息	2,450	7,157
投資有価証券評価損	2,435	5,491
固定資産除却損	3,968	-
上場関連費用	-	11,110
長期前払費用償却	2,347	624
その他	300	153
営業外費用合計	11,501	24,536
経常利益	193,678	258,102
特別損失		
減損損失	2,779	-
子会社株式評価損	³ 8,504	³ 471,461
特別損失合計	11,284	471,461
税引前当期純利益又は税引前当期純損失()	182,394	213,358
法人税、住民税及び事業税	54,134	84,968
法人税等調整額	22,770	2,817
法人税等合計	76,904	87,785
当期純利益又は当期純損失()	105,489	301,144

【売上原価明細書】

		前事業年度 (自 2023年10月1日 至 2024年9月30日)		当事業年度 (自 2024年10月1日 至 2025年9月30日)	
区分	注記 番号	金額(千円)	構成比 (%)	金額(千円)	構成比 (%)
労務費	1	292,763	31.0	290,357	33.0
経費		652,861	69.0	588,759	67.0
当期総製造費用		945,625	100.0	879,117	100.0
期首仕掛品棚卸高		-		-	
合計	2	945,625		897,117	
期末仕掛品棚卸高		-		-	
他勘定振替高		96,727		107,347	
売上原価		848,897		771,769	

原価計算の方法

原価計算の方法は、実際原価による個別原価計算であります。

(注) 1. 主な内訳は次のとおりであります。

項目	前事業年度(千円)	当事業年度(千円)
外注費	245,162	221,039
消耗品費	36,723	30,798
支払手数料	26,741	26,862
地代家賃	17,453	16,508
サーバ管理費	178,357	172,428
減価償却費	145,363	119,998

2. 他勘定振替高の内訳は次のとおりであります。

項目	前事業年度(千円)	当事業年度(千円)
ソフトウェア	96,727	107,347

【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2023年10月 1 日 至 2024年 9 月30日）

（単位：千円）

	株主資本								純資産合計
	資本金	資本剰余金			利益剰余金		自己株式	株主資本 合計	
		資本準備金	その他資本 剰余金	資本剰余金 合計	その他利益 剰余金	利益剰余金 合計			
					繰越利益 剰余金				
当期首残高	318,065	308,043	-	308,043	1,118,085	1,118,085	89,330	1,654,863	1,654,863
当期変動額									
当期純利益					105,489	105,489		105,489	105,489
剰余金の配当					46,533	46,533		46,533	46,533
自己株式の取得							99,979	99,979	99,979
自己株式の処分			4,404	4,404			28,482	24,078	24,078
利益剰余金から資本剰 余金への振替			4,404	4,404	4,404	4,404		-	-
当期変動額合計	-	-	-	-	54,551	54,551	71,496	16,944	16,944
当期末残高	318,065	308,043	-	308,043	1,172,636	1,172,636	160,827	1,637,918	1,637,918

当事業年度（自 2024年10月 1 日 至 2025年 9 月30日）

（単位：千円）

（単位：千円）

	株主資本								純資産合計
	資本金	資本剰余金			利益剰余金		自己株式	株主資本 合計	
		資本準備金	その他資本 剰余金	資本剰余金 合計	その他利益 剰余金	利益剰余金 合計			
					繰越利益 剰余金				
当期首残高	318,065	308,043	-	308,043	1,172,636	1,172,636	160,827	1,637,918	1,637,918
当期変動額									
当期純損失（ ）					301,144	301,144		301,144	301,144
剰余金の配当					48,065	48,065		48,065	48,065
自己株式の取得								-	-
自己株式の処分			8,442	8,442			30,552	22,110	22,110
利益剰余金から資本剰 余金への振替			8,442	8,442	8,442	8,442		-	-
当期変動額合計	-	-	-	-	357,652	357,652	30,552	327,100	327,100
当期末残高	318,065	308,043	-	308,043	814,984	814,984	130,275	1,310,818	1,310,818

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価基準及び評価方法

子会社株式及び関連会社株式
移動平均法による原価法

その他有価証券

市場価格のない株式等

移動平均法による原価法

なお、金融商品取引法第2条第2項により有価証券とみなされるものについて、組合契約に規定されている決算報告日に応じて入手可能な決算書を基礎として持分相当額を純額で取り込む方法によっております。

2. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産

定率法を採用しております。

(ただし、2016年4月1日以降に取得した建物附属設備は、定額法を採用しております。)

なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物及び構築物	8～15年
工具、器具及び備品	2～15年

(2) 無形固定資産

定額法を採用しております。

なお、ソフトウェアについては、社内における見込み利用可能期間(5年)に基づく定額法によっております。

3. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員の賞与の支払に備えるため、支給見込額のうち当事業年度負担額を計上しております。

(3) 株主優待引当金

株主優待制度に基づく将来の費用の発生に備えるため、発生見込額を計上しております。

4. 収益及び費用の計上基準

当社の顧客との契約から生じる収益に関する主要な事業における主な履行義務の内容及び当該履行義務を充足する通常の時点(収益を認識する通常の時点)は以下のとおりであります。

(1) サブスクリプションサービスに係る収益認識

サブスクリプションサービスにおいては、主にインターネットを経由して提供するクラウド・SaaSについて、月額利用料金として顧客から料金を収受しております。時の経過に応じて履行義務が充足されると判断しており、役務を提供する期間にわたり収益を認識しております。

(2) SES事業に係る収益認識

SES事業においては、顧客と準委任契約を結び契約内容に応じた役務提供を行っております。当該履行義務は、契約期間にわたり労働時間の経過に連れて充足されるものであり、収益は当該履行義務が充足される期間において、各月の収益として認識しております。

5. その他財務諸表作成のための基礎となる事項

(1) のれんの償却方法及び償却期間

のれんの償却については、その投資効果の発現する期間を個別に見積り、20年以内の合理的な期間で均等償却を行っております。

(2) 関連する会計基準等の定めが明らかでない場合に採用した会計処理の原則及び手続

当社は、当社の取締役、執行役員及び従業員に対して、譲渡制限付株式を割り当てる株式報酬制度を導入しております。これに係る会計処理につきましては、報酬債権を付与日における株式の時価に基づいて計上し、当該報酬費用を対象勤務期間にわたって費用として処理しております。

(重要な会計上の見積り)

有形固定資産及び無形固定資産の減損

(1) 当事業年度の財務諸表に計上した金額

(単位：千円)

	前事業年度	当事業年度
有形固定資産	50,455	62,703
のれん	44,312	15,605
無形固定資産(のれん以外)	334,223	320,143
減損損失	2,779	-

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

当社は、原則として事業用資産については事業セグメントを基礎としてグルーピングを行っております。また、処分予定資産及び遊休資産については、個別にグルーピングを行っております。

当社は、有形固定資産及び無形固定資産(のれんを含む)のうち減損の兆候がある資産又は資産グループについて、当該資産又は資産グループから得られる割引前将来キャッシュ・フローの総額が帳簿価額を下回る場合には、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として計上しております。減損の兆候の把握、減損損失の認識及び測定にあたっては将来の市場の成長度合い、利益の予想、資産の予想使用期間、割引率等に基づいて慎重に検討しておりますが、その見積りの前提とした条件や仮定に変更が生じ減少した場合、減損処理が必要となる可能性があります。

関係会社株式の評価

(1) 当事業年度の財務諸表に計上した金額

(単位：千円)

	前事業年度	当事業年度
関係会社株式	873,072	452,851
子会社株式評価損	8,504	471,461

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

当社は、市場価格のない関係会社株式について当該関係会社等の財政状態の悪化により実質価額が著しく低下した時には、回復可能性が十分な証拠によって裏付けられる場合を除いて、関係会社株式について評価損を認識しています。実質価額は、関係会社の1株当たりの純資産額、若しくは1株当たりの純資産額に株式取得時にいて認識した超過収益力等を反映した金額としてます。

当事業年度において、連結子会社であるルビー・グループ(株)及び(株)トピカの関係会社株式の実質価額が著しく低下したため、子会社株式評価損をそれぞれ241,209千円及び230,251千円計上しております。

なお、翌事業年度以降においての業績が悪化し、実質価額に影響を与えた場合、追加の評価損を計上する可能性があります。

(表示方法の変更)

(貸借対照表)

前事業年度まで「流動資産」の「その他」に含めていた「未収入金」は、金額的重要性が増したため、当事業年度より独立掲記することとしました。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前事業年度の貸借対照表において「流動資産」の「その他」に表示していた10,435千円は、「未収入金」3,319千円、「その他」7,116千円として組み替えております。

(損益計算書)

前事業年度まで「営業外収益」の「その他」に含めていた「受取利息」は、金額的重要性が増したため、当事業年度より「受取配当金」と合わせて「受取利息及び配当金」として独立掲記することとしました。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前事業年度の損益計算書において「営業外収益」の「その他」に表示していた510千円、「受取配当金」に表示していた31,609千円は、「受取利息及び配当金」31,780千円、「その他」339千円として組み替えております。

(貸借対照表関係)

保証債務

当社の連結子会社であるルビー・グループ㈱の債務について、連帯保証を行っております。

	前事業年度 (2024年9月30日)	当事業年度 (2025年9月30日)
ルビー・グループ㈱	- 千円	80,735千円

(損益計算書関係)

1．販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額並びにおおよその割合は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2023年10月 1 日 至 2024年 9 月30日)	当事業年度 (自 2024年10月 1 日 至 2025年 9 月30日)
販売促進費	92,945千円	82,813千円
広告宣伝費	84,307	101,379
旅費交通費	14,698	14,607
役員報酬	84,739	86,036
給与賞与	597,607	619,386
法定福利費	93,509	98,585
減価償却費	13,087	18,259
のれん償却額	68,009	28,706
支払手数料	63,529	78,398
地代家賃	51,378	52,384
賞与引当金繰入額	12,528	17,051
貸倒引当金繰入額	1,881	808
おおよその割合		
販売費	59%	59%
一般管理費	41	41

2．関係会社との取引高

	前事業年度 (自 2023年10月 1 日 至 2024年 9 月30日)	当事業年度 (自 2024年10月 1 日 至 2025年 9 月30日)
営業取引以外の取引による取引高	55,713千円	53,070千円

3．子会社株式評価損

	前事業年度 (自 2023年10月 1 日 至 2024年 9 月30日)	当事業年度 (自 2024年10月 1 日 至 2025年 9 月30日)
子会社株式評価損（特別損失）	8,504千円	471,461千円

前事業年度に、連結子会社である㈱スプーの株式について、財政状態の悪化により実質価額が著しく下落したため、8,504千円の評価損を特別損失として計上しております。

当事業年度に、連結子会社である㈱トピカ及びルビー・グループ㈱の株式について、取得当初見込まれていた超過収益力が見込まれなくなったため、㈱トピカ株式について230,251千円、ルビー・グループ㈱株式について241,209千円の評価損を特別損失として計上しております。

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式は、市場価格のない株式等のため、子会社株式及び関連会社株式の時価を記載していません。

なお、市場価格のない株式等の子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額は次のとおりです。

(単位：千円)

区分	前事業年度 (2024年 9 月30日)	当事業年度 (2025年 9 月30日)
子会社株式	867,072	446,851
関連会社株式	6,000	6,000
計	873,072	452,851

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2024年9月30日)	当事業年度 (2025年9月30日)
繰延税金資産		
賞与引当金	5,131千円	9,954千円
未払事業税	3,476	4,885
有形固定資産	4,941	3,196
資産除去債務	6,624	12,261
投資有価証券	5,104	-
関係会社株式	9,512	158,158
譲渡制限付株式報酬	8,602	7,947
資産調整勘定	4,816	-
貸倒引当金	1,226	946
その他	915	642
繰延税金資産小計	50,350	197,991
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	12,534	158,158
評価性引当額小計(注)1	12,534	158,158
繰延税金資産合計	37,816	39,833
繰延税金負債		
資産除去債務に対応する除去費用	2,101	6,935
繰延税金負債合計	2,101	6,935
繰延税金資産純額	35,715	32,897

(注)1. 繰延税金資産から控除された額(評価性引当額)に重要な変動が生じております。当該変動の主な内容は、関係会社株式の増加によるものであります。

(注)2. 法人税等の税率の変更による繰延税金資産及び繰延税金負債の金額の修正

「所得税法等の一部を改正する法律(令和7年法律第13号)」が2025年3月31日に国会で成立したことに伴い、2026年4月1日以後開始する連結会計年度より、「防衛特別法人税」の課税が行われることになりました。

これに伴い、2026年4月1日以後開始する連結会計年度以降に解消が見込まれる一時差異等に係る繰延税金資産及び繰延税金負債については、法定実効税率が30.6%から31.5%に変更し計算しております。

なお、この税率変更による影響額は軽微であります。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2024年9月30日)	当事業年度 (2025年9月30日)
法定実効税率	30.6%	当事業年度において、税引
(調整)		前当期純損失を計上している
交際費等永久に損金に算入されない項目	4.1	ため、記載を省略しておりま
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	5.0	す。
住民税均等割	0.7	
のれんの償却額	11.4	
評価性引当額の増減	0.2	
税率変更による期末繰延税金資産の増加額	-	
その他	0.1	
税効果会計適用後の法人税等の負担率	42.2	

（収益認識関係）

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報は、連結財務諸表「注記事項（収益認識関係）」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

（重要な後発事象）

連結財務諸表「注記事項（重要な後発事象）」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (千円)	当期末残高 (千円)	当期末減価 償却累計額 又は償却 累計額 (千円)	当期償却額 (千円)	差引当期末 残高 (千円)
有形固定資産							
建物	66,449	17,300	-	83,749	52,787	3,546	30,961
工具、器具及び備品	231,926	11,932	2,370	241,488	209,746	13,286	31,741
有形固定資産計	298,375	29,232	2,370	325,237	262,533	16,832	62,703
無形固定資産							
商標権	18,106	-	-	18,106	9,937	1,810	8,168
ソフトウェア	995,690	88,853	-	1,084,543	818,737	119,615	265,805
ソフトウェア仮勘定	21,350	110,126	88,853	42,623	-	-	42,623
のれん	386,866	-	-	386,866	371,260	28,706	15,605
その他	3,546	-	-	3,546	-	-	3,546
無形固定資産計	1,425,559	198,979	88,853	1,535,686	1,199,936	150,133	335,749
長期前払費用	102,321	21,863	238	123,945	76,556	39,748	47,389

(注) 1. 当期増加額のうち主なものは次のとおりです。

建物及び構築物	資産除去費用の計上	17,300千円
ソフトウェア	ソフトウェア仮勘定からの振替	88,853千円
ソフトウェア仮勘定	自社利用ソフトウェアの制作	110,126千円
長期前払費用	譲渡制限付株式報酬の発行	14,017千円

2. 当期減少額のうち主なものは次のとおりです。

ソフトウェア仮勘定	ソフトウェアへの振替	88,853千円
長期前払費用	譲渡制限付株式報酬の減少	238千円

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (目的使用) (千円)	当期減少額 (その他) (千円)	当期末残高 (千円)
貸倒引当金	4,009	1,854	2,769	-	3,094
賞与引当金	16,780	90,286	74,516	-	32,550
株主優待引当金	8,119	18,659	17,018	-	9,760

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第 6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	毎年10月 1 日から翌年 9 月30日まで				
定時株主総会	毎事業年度終了後 3 ヶ月以内				
基準日	毎年 9 月30日				
剰余金の配当の基準日	毎年 3 月31日 毎年 9 月30日				
1 単元の株式数	100株				
単元未満株式の買取り及び売渡し 取扱場所 株主名簿管理人 取次所 買取・売渡手数料	大阪市中央区北浜四丁目 5 番33号 三井住友信託銀行(株) 証券代行部 東京都千代田区丸の内一丁目 4 番 1 号 三井住友信託銀行(株) - 無料				
公告掲載方法	電子公告とします。ただし、電子公告によることができない事故その他のやむを得ない事由が生じたときは、日本経済新聞に掲載する方法により行います。 当社の公告掲載URL https://www.yrglm.co.jp/				
株主に対する特典	<ul style="list-style-type: none"> ・対象となる株主様 毎年 3 月末及び 9 月末時点の当社株主名簿に記載又は記録された1単元（100株）以上ご所有の株主様を対象といたします。 ・株主優待制度の内容 対象となる株主様へ下表のとおりデジタルギフト券を年 2 回贈呈いたします。 <table border="1"> <tr> <td>保有株式数</td><td>贈呈金額</td></tr> <tr> <td>100株以上（ 1 単元以上）</td><td>1,000円分</td></tr> </table>	保有株式数	贈呈金額	100株以上（ 1 単元以上）	1,000円分
保有株式数	贈呈金額				
100株以上（ 1 単元以上）	1,000円分				

（注） 当社の単元未満株式を有する株主は、次の各号に掲げる権利以外の権利を行使することができない旨を定款に定めております。

- (1) 会社法第189条第 2 項各号に掲げる権利
- (2) 会社法第166条第 1 項の規定による請求をする権利
- (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利
- (4) 単元未満株式の売渡請求をする権利

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社には、親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

第24期（自 2023年10月1日 至 2024年9月30日）2024年12月20日 近畿財務局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

2024年12月20日 近畿財務局長に提出

(3) 有価証券報告書の訂正報告書及び確認書

2024年12月18日 近畿財務局長に提出

2023年12月22日に提出した第23期有価証券報告書の訂正報告書及び確認書

(4) 半期報告書及び確認書

（第25期中）（自 2024年10月1日 至 2025年3月31日）2025年5月8日 近畿財務局長に提出

(5) 臨時報告書

2024年12月23日 近畿財務局長に提出

金融商品取引法第24条の5第4項及び企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）に基づく臨時報告書であります。

2025年12月9日 近畿財務局長に提出

金融商品取引法第24条の5第4項及び企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第3号（特定子会社の異動）の規定に基づく臨時報告書であります。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2025年12月16日

株式会社イルグルム

取締役会 御中

PwC Japan有限責任監査法人

大阪事務所

指定有限責任社員
業務執行社員

公認会計士

内園 仁美

指定有限責任社員
業務執行社員

公認会計士

谷吉 英樹

< 連結財務諸表監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社イルグルムの2024年10月1日から2025年9月30日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社イルグルム及び連結子会社の2025年9月30日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定（社会的影響度の高い事業体の財務諸表監査に適用される規定を含む。）に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

強調事項

注記事項（重要な後発事象）の「シルバーエッグ・テクノロジー㈱への公開買付け等の実施」に記載されているとおり、会社は2025年11月14日開催の取締役会において、シルバーエッグ・テクノロジー㈱の普通株式、新株予約権を対象とする公開買付け（以下、「本公開買付け」）を実施し、同社を完全子会社とすることを目的とした一連の取引を実施することを決議した。

注記事項（重要な後発事象）の「多額な資金の借入について」に記載されているとおり、本公開買付けの方法によるシルバーエッグ・テクノロジー㈱の株式取得資金に充当することを目的として、金融機関とコミットメント期間付タームローン契約の締結を行うことを決議し、2025年11月26日付で契約を締結した。

当該事項は、当監査法人の意見に影響を及ぼすものではない。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当連結会計年度の連結財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、連結財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

ルビー・グループ株式会社に関するのれんを含む固定資産の減損	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>注記事項「（重要な会計上の見積り）固定資産の減損」に記載されているとおり、株式会社イルグルムの当連結会計年度の連結損益計算書には、ルビー・グループ株式会社（以下、「ルビー社」という）に係る減損損失216,845千円が計上されている。</p> <p>株式会社イルグルムは、原則として他の資産又は資産グループのキャッシュ・フローから概ね独立したキャッシュ・フローを生み出す最小単位によって資産のグルーピングをしており、連結子会社にあっては主に、それぞれの会社を1つの独立したグルーピングの単位としている。また、これらの固定資産は定期的に減価償却されるが、減損の兆候があると認められる場合には、資産グループから得られる割引前将来キャッシュ・フロー総額とのれんを含む固定資産の帳簿価額を比較することによって、減損損失の認識の要否を判定している。その結果、減損損失の認識が必要と判定された場合には、固定資産の帳簿価額を回収可能価額まで減額し、固定資産の帳簿価額の減少額は減損損失として認識される。</p> <p>ルビー社のECオペレーションマネジメント事業に関して、当連結会計年度に主要顧客の一部に解約可能性が生じたことにより、将来キャッシュ・フローの獲得の不確実性が増したことから、当初の事業計画を保守的な計画に見直した結果、のれんを含む固定資産について、経営環境の著しい悪化による減損の兆候が認められた。このため、減損損失の認識の判定が行われ、割引前将来キャッシュ・フローの総額がのれんを含む固定資産の帳簿価額を下回ったことから減損損失を認識し、回収可能価額がゼロであったため、のれんを含む固定資産全額について減損損失が計上されている。当該判定に用いられた将来キャッシュ・フローは、経営者が作成したルビー社の事業計画を基礎として見積もられており、売上高及び営業利益の予測等の不確実性を伴うため、これらの経営者による判断が将来キャッシュ・フローの見積りに重要な影響を及ぼす。</p> <p>以上から、当監査法人は、ルビー社に関するのれんを含む固定資産の減損損失の認識の判定に関する妥当性が、当連結会計年度の連結財務諸表監査において特に重要であり、監査上の主要な検討事項に該当すると判断した。</p>	<p>当監査法人は、ルビー社に関するのれんを含む固定資産の減損損失の認識の判定に関する妥当性を評価するため、主に以下の手続を実施した。</p> <p>（１）内部統制の評価 のれんを含む固定資産の減損損失の認識の判定に関連する内部統制の整備及び運用状況の有効性を評価した。</p> <p>（２）減損の兆候判定の評価 減損の兆候判定の妥当性を検討するため、経営者への質問、主要顧客との通信文書の閲覧を通じて、ルビー社の経営環境を理解した。</p> <p>（３）将来キャッシュ・フローの見積りの合理性の評価 将来キャッシュ・フローの見積りの基礎となるルビー社の事業計画の作成にあたって採用された主要な仮定が適切かどうかを評価するため、主に以下の手続を実施した。</p> <p>当初の事業計画における当期の売上高及び営業利益と実績を比較し、差異を分析することで経営者の見積りの精度を評価した。</p> <p>経営者が保守的に見直した事業計画に対して監査人が独自にストレス（補正）をかけた結果と比較し、その合理性を検討した。</p>

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査等委員会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の連結財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

連結財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と連結財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうか検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

連結財務諸表に対する経営者及び監査等委員会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査等委員会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 連結財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・ 連結財務諸表に対する意見表明の基礎となる、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手するために、連結財務諸表の監査を計画し実施する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指揮、監督及び査閲に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査等委員会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査等委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去するための対応策を講じている場合又は阻害要因を許容可能な水準にまで軽減するためのセーフガードを適用している場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査等委員会と協議した事項のうち、当連結会計年度の連結財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

< 内部統制監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社イルグルムの2025年9月30日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、株式会社イルグルムが2025年9月30日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定（社会的影響度の高い事業体の財務諸表監

査に適用される規定を含む。)に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

内部統制報告書に対する経営者及び監査等委員会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査等委員会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。
- ・ 財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。
- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手するために、内部統制の監査を計画し実施する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指揮、監督及び査閲に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査等委員会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査等委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去するための対応策を講じている場合又は阻害要因を許容可能な水準にまで軽減するためのセーフガードを適用している場合はその内容について報告を行う。

<報酬関連情報>

当監査法人及び当監査法人と同一のネットワークに属する者に対する、会社及び子会社の監査証明業務に基づく報酬及び非監査業務に基づく報酬の額は、「提出会社の状況」に含まれるコーポレート・ガバナンスの状況等(3)【監査の状況】に記載されている。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1. 上記の監査報告書の原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2. XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2025年12月16日

株式会社イルグルム

取締役会 御中

PwC Japan有限責任監査法人

大阪事務所

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	内園 仁美
--------------------	-------	-------

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	谷吉 英樹
--------------------	-------	-------

<財務諸表監査>

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社イルグルムの2024年10月1日から2025年9月30日までの第25期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社イルグルムの2025年9月30日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定（社会的影響度の高い事業体の財務諸表監査に適用される規定を含む。）に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

強調事項

注記事項（重要な後発事象）の「シルバーエッグ・テクノロジー㈱への公開買付け等の実施」に記載されているとおり、会社は2025年11月14日開催の取締役会において、シルバーエッグ・テクノロジー㈱の普通株式、新株予約権を対象とする公開買付け（以下、「本公開買付け」）を実施し、同社を完全子会社とすることを目的とした一連の取引を実施することを決議した。

注記事項（重要な後発事象）の「多額な資金の借入について」に記載されているとおり、本公開買付けの方法によるシルバーエッグ・テクノロジー㈱の株式取得資金に充当することを目的として、金融機関とコミットメント期間付タームローン契約の締結を行うことを決議し、2025年11月26日付で契約を締結した。

当該事項は、当監査法人の意見に影響を及ぼすものではない。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当事業年度の財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

関係会社株式（ルビー・グループ株式会社）の評価	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>当事業年度の貸借対照表に計上した関係会社株式は452,851千円であり、総資産の19.4%を占めている。そのうち、子会社であるルビー・グループ株式会社（以下、「ルビー社」という）の株式は241,209千円である。</p> <p>注記事項「（重要な会計上の見積り）関係会社株式の評価」に記載されているとおり、会社は、市場価格のない関係会社株式について、当該関係会社等の財政状態の悪化により実質価額が著しく低下した時には、回復可能性が十分な証拠によって裏付けられる場合を除いて、評価損を認識することとしている。実質価額は、関係会社の1株当たりの純資産額、若しくは1株当たりの純資産額に株式取得時において認識した超過収益力等を反映した金額としている。</p> <p>会社は、ルビー社の株式について、当事業年度に主要顧客の一部に解約可能性が生じたことにより、超過収益力が毀損したと判断した。これにより、株式の実質価額が取得原価に比べて著しく低下しており、業績の回復が見込まれないと判断したため、関係会社株式評価損241,209千円を計上している。</p> <p>連結財務諸表に関する監査上の主要な検討事項に記載のとおり、ルビー社の固定資産には減損の兆候が識別されており、関係会社株式の実質価額の算定にあたっては、当該子会社に関連する固定資産の減損の検討結果を考慮する必要がある。当該子会社の固定資産の減損損失の認識の要否の判定に用いる将来キャッシュ・フローは、経営者が作成したルビー社の事業計画を基礎として見積られている。当該事業計画には連結財務諸表に関する監査上の主要な検討事項「ルビー・グループ株式会社に関するのれんを含む固定資産の減損」に記載の仮定がおかれており、不確実性を伴うものである。</p> <p>以上のとおり、関係会社株式の評価は、財務諸表における金額的重要性が高く、実質価額の算定において検討が必要となる当該子会社に関連する固定資産の減損損失の認識の判定には、売上高及び営業利益の予測等の不確実性を伴うことから、当監査法人は当該事項を監査上の主要な検討事項に該当するものと判断した。</p>	<p>当監査法人は、関係会社株式の評価の検討に当たり、主に以下の監査手続を実施した。</p> <p>関係会社株式の評価に関連する内部統制の整備及び運用状況の有効性を評価した。</p> <p>関係会社株式（ルビー社）の実質価額に反映されている超過収益力の毀損の判断結果について検討するため、経営者への質問、主要顧客との通信文書の閲覧を通じて、ルビー社の経営環境を理解した。</p> <p>関係会社株式（ルビー社）の実質価額の算定にあたり、当該子会社に関連する固定資産の減損損失の認識の判定に関する妥当性について検討した。実施した手続は、連結財務諸表に関する監査上の主要な検討事項「ルビー・グループ株式会社に関するのれんを含む固定資産の減損」に記載のとおりである。</p> <p>関係会社株式の取得原価と、発行会社の1株当たり純資産を基礎として算定した実質価額を比較し、経営者による関係会社株式の評価の妥当性を検証した。</p>

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査等委員会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうか検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

財務諸表に対する経営者及び監査等委員会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査等委員会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査等委員会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査等委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去するための対応策を講じている場合又は阻害要因を許容可能な水準にまで軽減するためのセーフガードを適用している場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査等委員会と協議した事項のうち、当事業年度の財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

< 報酬関連情報 >

報酬関連情報は、連結財務諸表の監査報告書に記載されている。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1. 上記の監査報告書の原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。

2. XBRLデータは監査の対象には含まれていません。